

もくじ

ごあいさつ

北九州市長 武内 和久

選考講評

あさのあつこ／最相 葉月／リリー・フランキー

小学生の部



大賞

半分メシ

片桐

紡

優秀賞

母と私のがん戦記

能美

にな

初めての体けん

喜多

結理

選考委員特別賞

あさのあつこ賞

自分が自分へ

川名

岳大

最相葉月賞

たいは、なぜ赤いのか

立山

怜佳

リリー・フランキー賞

こくらのきりだんす

若狭

早

中学生の部



大賞

雲散鳥没

チャケ
レオン

42

優秀賞

光に馳せる

孫そん
莉佳りか

65

上を見て、下を見て

辻つじ
陽菜子ひなこ

76

選考委員特別賞

あさのあつこ賞

サシバに向き合った一年間

我那覇がなは
優愛ゆうあ

84

最相葉月賞

青を継ぐ

大水おおみず
音諒のり

91

リリー・フランキー賞

実弟のはじめてのおつかい

八尾やお
結花ゆいか

98

資料

小学生の部 受賞作品・最終候補作品

102

資料

中学生の部 受賞作品・最終候補作品

103

資料

応募状況

104

ごあいさつ



北九州市長 武内 和久

第16回子どもノンフィクション文学賞を受賞された皆様、そして、ご家族、学校関係者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

選考にあたり、多大なるご尽力を賜りました選考委員の皆様、応募を取りまとめいただいた学校関係者の皆様をはじめ、実施にあたりご協力をいただいた全ての皆様に深くお礼を申し上げます。

この文学賞は、子どもたちが体験した出来事や取材したことを「ノンフィクション」として書くことで、人々や社会への関心を持つきっかけとなること、そして北九州市ゆかりの文学者が築いてきた豊かな土壌を継承していくことを願って、2009年から開催しています。

16回目を迎える今回は、国内外から小学生の部に133編、中学生の部に99編の

合計232編の作品が寄せられました。多くの力作が集まり、選考委員の皆様は、大変悩まれながら選考されたと伺っております。

応募された作品の中から、小学生の部は片桐紡さんの「半分メシ」、中学生の部はチャケ レオンさんの「雲散鳥没」が大賞に決定しました。このほか10名の方の作品が優秀賞、選考委員特別賞に選ばれました。

この文学賞の応募作品には、子どもたちの日々の出来事や体験したこと、興味を持って根気強く調べていく様子などが、自分の言葉で生き生きと表現されています。作品を読まれた皆様も、きっとハラハラやドキドキした体験が共感できると思います。

この文学賞に応募された皆様が、今後も自分の言葉で表現する楽しさを感じ、自由な創作活動を続けていかれることを願っています。

文学をはじめ、文化芸術には、人の心に潤いと活力をもたらす大きな力があり、その創造的な活動は、経済や社会を元気にする重要な要素であると考えています。

北九州市では、次世代を担う子どもたちへの文学的風土の継承や北九州ゆかりの文学者の顕彰などを通じて、誰もが等しく文化芸術に親しみ、楽しめる「彩のあるまちづくり」を進めてまいります。引き続き皆様のお力添えをお願い申し上げます。

それぞれの輝き

児童文学作家 あさの あつこ



1954年岡山県美作市生まれ。青山学院大卒。岡山市にて小学校の臨時教諭を務めたのち、作家デビュー。
『パッテリー』で第35回野間児童文芸賞受賞。『パッテリー』全6巻、第54回小学館児童出版文化賞受賞。たまたらで湯浅恋愛文学賞受賞。著書に『NO.6』シリーズ、『THE MANZAI』シリーズ、アリン・アリン『烈風たなか』『白兔』シリーズなど多数。

小学生の部

『半分メシ』を読み終えた直後、わたしは応募原稿の端に◎を印していました。そして、最優秀賞に推すなら、これしかないと思いを定めました。わずかに四枚、その枚数の中でわたしは何度もうなずき、感心し、心を打たれ、拍手しました。こんなに愉快で、楽しく、深く考えさせられた作品は久しぶりです。まず「半分」とは何か。そこを考える発想力に驚きました。何十年も生きてきて、わたしはただの一度も考えたことがなかったからです。作者の片桐くんは、考えただけでなく自分で答えをつかむべく、自分の周りの人々を巻き込んでいきます。世の中はいろんな「半分」であふれている気がします。この一文にはうなりました。そして、何より光り輝くら

ストの三行。ずばり的を射た、真実の三行です。おじいちゃん、あなたのお孫さんは、すでにこの世の真実をつかんでいますよ。すごいですよ。

優秀賞の『母と私のがん戦記』と『初めての体けん』は、どちらも重いテーマと真剣に向き合っている作者に圧倒されました。『初めての体けん』の最後の三行、秀逸です。作者の喜多さんの緊張がしっかり伝わってきました。『母と私のがん戦記』もそうですが、これほどたいへんな日々やボランティア経験を淡々とあるがままを書く。簡単なことではありません。どうしても、つい、命の大切さとか、支え合う意味とか、ありきたりの結論に結び付けてしまおうのですが、能美さんも喜多さんも、どこまでも自分の体けん、自分の想いから言葉を発しています。だからこそ、とても個性的な能美さんだけにしか、喜多さんだけにしか書けない作品が生まれました。みごとです。

あさのあつこ賞には川名岳大さんの『自分が自分へ』を選ばせていただきました。正直、読みにくくはありましたが、ただ、読み進めていけばいくほど、その読みにくさまでが力となって迫ってくるのです。そう、とてつもない迫力でした。自分自身をさらけ出し、自分自身を見出ししていく。とてもパワフルで繊細な作品だと思います。

中学生の部

中学生の部は、チャケレオンさんの『雲散鳥没』に決まりました。チャケさんはこの賞の常連といえるほど、毎年、新しい視点の力のある作品を届けてくれています。

その中でも、今回の作品は、ある意味、チャケさんの集大成というか、自分のルーツも含め、世界の今、ドイツの現状、そして人間の歴史を見つめた作品になっています。広い視点を持ちながら、ミクロ、一人一人の個に迫っているのは、さすがとしか言えません。さらに、作者の感情もきつちりと書き込まれているからでしょう、体温を感じます。これから、チャケさんが自分を、自分の周辺を、世界をどう見つめ、どう表現していくか楽しみでなりません。

優秀賞は辻陽菜子さんの『上を見て、下を見て』と、孫莉佳さんの『光に馳せる』の二作です。とても、対照的な作品だなと感じています。『上を見て、下を見て』は、うっかり落としてしまったお気に入りのキーホルダーを必死に探す。言ってしまうえば、ただそれだけの話です。それが、とてもおもしろい。そして、心に残るのです。キャラクターのキーホルダーなんて関心のない者には、ただのおモチャ以下でしょう。それを何とか見つけ

出そうと奮闘する作者の姿に、いつの間にかわたし（キーホルダーに何の関心もない者の一人です）は引き込まれ、はらはらし、見つけた瞬間に思わず吐息を漏らしました。困難を自分の力で乗り越えていく姿を細やかな表現でつづった作者は見事です。『光に馳せる』は、自分の祖父の半生を骨太な文章と冷静でありながら情のこもった視点で表した力作です。それは、歴史の証言ともなり、一人の男の物語となり、作者の祖父への愛情の証ともなりました。一面的でなく多面性のある作品は、人の心に届きます。その好例のような『光に馳せる』でした。

あさのあつこ賞は我那覇優愛さんの『サシバに向き合った一年間』を選ばせていただきました。読んでみるとサシバの羽音や鋭い目付きまで浮かんでくるようでした。さらにサシバの観察や保護を通して、伊良部島の抱える今が浮き上がってきます。「住みにくい島になったよね。」母が漏らした眩きの意味を考え続けねばならないでしょう。選にはもれましたが『箱根浪漫』の鉄道愛にも強く惹かれました。

人生はおもしろい

ノンフィクションライター 最相 葉月



©新潮社

1963年生まれ。「絶対音感」で小学館ノンフィクション大賞、「星新一」「○○一話をつくった人」で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞など五つの賞を受賞。他の著作に「青いバネ」「ロンドン・エジン」「セラピスト」「れるるれる」「ダケネ 中国朝鮮族の友と日本」「理系という生き方」「証し 日本のキリスト者」「胎児のはなし」（共著）、当賞受賞者への取材を含む「調べてみよう、書いてみよう」（講談社）など。主なテーマは科学探検と人間の関係性、精神医学、教育、音楽ほか。

選考会のたびに、この賞があつて本当によかつたと思います。これまで知ることのなかつた誰かの人生、考えることもなかつたテーマ、思いもかけなかつた発想に必ず出会えるからです。今年もそうでした。とくに家族を描く作品に魅力的なものが多かつた。一方、自分の外にテーマを置いた作品というのは、プロでも書き方がむずかしいものです。斬新な切り口や思いがけない視点があつるものに、高い評価が集まりました。

小学生の部大賞は、満場一致で「半分メシ」に決まりました。祖父母のごはん時の会話をきっかけに「半分とは何か」を考える。視点の置き方がとてもユニークで、

この先どうなるのだろうとドキドキして、ラストで見事にやられました。家庭の平和論は国際政治にまで展開できそう。ほかの作品も読んでみたいと思いました。

優秀賞「母と私のがん戦記」は、がんを患つた母と娘の闘病記です。医師である母親の科学的な姿勢と医学への信頼はもちろん、ユニークなキャラクターと娘への愛情が丁寧に描かれており、病に支配されない闘病とは何か、考えさせられました。感情的ではないのに、静かに伝わってくるものがありました。

優秀賞「初めての体けん」は、入院中の子どもたちと遊んだり、食事を助けたりする子どもボランティア体験記。呼吸器をつけた子や体を動かせない子のケアを、看護師さんのそばで手伝う様子が淡々と描かれますが、最後の数行でその時間がひっくり返る。子どもの頃に同じような体験があり、当時の感情がよみがえりました。私も怖かつたです。

最相賞は、「たいは、なぜ赤いのか」です。マダイはなぜ赤いのかに始まり、サケやフラミンゴなど、生きものの体が赤くなる仕組みについてぐんぐん調べを進めま

す。食べ物の影響から進化まで、わからないことを素通りせず、立ち止まって調べ、取材もする。結論に腹落ちしました。これからも探究心を大切にしてください。

中学生の部大賞は「雲散鳥没」です。旧東ドイツに生きた祖父とその両親の人生を軸に、家族の百年とその影を描きます。ドレスデン空襲とナチス支配、東西分断とベルリンの壁崩壊が、一人一人に刻んだ深い爪痕が浮き彫りになり、胸に迫ります。曾祖父の謎を解き明かすにはまだ時間がかかるでしょうが、これを問い続けることが作者の生きることかもしれないと思いました。

優秀賞「光に馳せる」は、中国人の「男」が最先端の技術を開発し、日本で起業するまでの半生を描いた作品です。文化大革命による下放と日本への単身留学、光通信用フィルターの成膜装置の発明と実用化への道のり。インターネットが当たり前となった時代に、その立役者がどんな生き方をしたのか。類まれな人生に感銘を受け、励まされました。

優秀賞「上を見て、下を見て」は、落としたお気に入りキャラクターのキーホルダーを探す「だけ」の話で

す。「だけ」なのに、ドキドキしながら一緒に探している気持ちになるのは筆力ゆえでしょうか。必死に探す娘の姿を見て、お父さんまでいつのまにか巻き込まれる。「推し」ってどれだけすごい引力なんだと、いろいろ考えさせられました。

最相賞「青を継ぐ」は、幼くして父親を亡くした祖父の人生と自分の人生を重ね合わせ、生きる意味を問う作品です。進学を断念してきょうだいのために働いてきた祖父が教えてくれた雲の名前や植物の名前、草笛の吹き方。工場労働でいびつに折れ曲がったその手指を見つめながら、知識や経験だけでなく、生き方を受け継ごうと決めるまでの心の軌跡が静かな筆致で描かれます。特別なことが起こるわけではなく、最初はいい作品だと思っただけだったのですが、二度目に読んだとき、言葉選びの繊細さと、表現したい感情を言葉にする力に気づきました。これからも書き続けてください。

みんなのチャレンジ待ってます！

イラストレーター・作家・俳優 リリー・フランキー



© HIROSHI NOMURA

1963年、北九州市小倉生まれ。武蔵野美術大学卒業。イラストやデザインのほか、文筆、写真、作詞・作曲、俳優など、多種多様な分野で活動する。自身初の長編小説『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』は06年本屋大賞を受賞、200万部を超えるベストセラーとなった。オリジナル絵本『おでんくん』はアニメ化され、オリジナルグッズも性別・世代を超え幅広い人気を集めている。

小学生の部

大賞「半分メシ」は、食卓でのおじいちゃんとおばあちゃんのご飯半分のやりとりを見たことから始まります。「半分ってなんだ」という、特別なことではない、日常の中の疑問に目を向けた視点が面白く、よく書けています。世情に触れつつ、最終的におじちゃんに話が帰っていくのが、物語をつくるセンスが良い作品です。

優秀賞「母と私のがん戦記」は、がんと診断された母と治療を終えるまでの二人の日々をつづった作品です。家族との闘病を題材にした作品は多く見ますが、この作

品では、なだらかに母の様子、自分の様子、環境の変化を極端な抑揚をつけずに丁寧に書いています。ちよつとした描写で物事の移り変わりの空気感がよく伝わってきて、いい文章だと感じました。

優秀賞「初めての体けん」は、病気の子どものところへ初めてボランティアに行き、食事のお手伝いなどを通して、ドキドキした体験を書いた作品です。病気を抱え、病院で生活する同じ年代の子どもと接する機会などはあまりないと思います。緊張感が伝わってきて、最後まで、ヒリヒリとした気持ちで読めました。

リリー・フランキー賞「こくらのきりだんす」は、小倉に住む親せきの「こくらのおばちゃん」から桐ダンスを譲ってもらう日のことを書いた作品です。小学1年生のこの子の世界、ディテールの家族の風景、物の行き来が紡ぐ風景、どれもすごくいいと思いました。こんな素敵な温かな環境のなかで、感性をさらに伸ばしてほしいと願っています。

中学生の部

大賞「雲散鳥没」は、激動の時代のドイツを生き抜いた、祖父母の生涯を中心とした家族の物語です。書く力、筆力、取材力、すべてがずば抜けており、ディテールがすごい。一つ一つの過程の中から、においがするほどです。一つ欲を言えば、タイトルが少し唐突だったかもしれない。だけど、すごくよく書けている。

優秀賞「光に馳せる」は、37年前に母国・中国を離れ、新天地・日本へと向かった祖父の物語です。困難を乗り越え、いろいろな人に支えられながら、思いを貫く祖父の生きざまが興味深く、とてもよく書けています。冒頭で、「その男」と書くところと偉人登場みたいになってしまっているので、「彼」くらいでよかったかもしれませんね。

優秀賞「上を見て、下を見て」は、大事なキーホルダーを失くし、探し回る作品です。ぼくはサンリオではポムポムプリン派ですが、最後までドキドキで読みました。ただ、キーホルダーを失くしたただけなのに、初めて何か

に夢中になっている娘に対する父の気持ちがよく分かりました。あと、見つかった後に、洗ってあげたのかなど、どうしたのかも少し気になりました。

リリー・フランキー賞「実弟のはじめてのおつかい」は、はじめてのおつかいに挑戦することとなった弟を姉がじっくり尾行して見守った作品です。淡々と「です・ます調」でユーモアに書けているのがすごくよくて、とてもセンスを感じました。好きな作品です。

この文学賞には、たくさん子どもたちに挑戦してほしいと願っています。自分でこの賞を見つけて応募する子もいるでしょうし、学校で書かされて応募する子もいるかもしれませんが、感じたまま、思ったままをぶつけてください。粗削りの、ありのままの原石に出会えることを楽しみに待っています。(談)



小学生の部

大賞

半分メシ

新座市立東北小学校 三年

片桐 紡

「またか…」これは、おばあちゃんの家でおこった出来事です。

その日、ぼくはおばあちゃんの家で、夜ごはんを食べていました。毎週土曜日はおばあちゃんの家におとまりしていて、夜ごはんをいっしょに食べます。すると、いっしょにご飯のちゅうで、いっしょにご飯を食べているおじいちゃんが「ご飯、半分。」と言い、おばあ

ちゃんにお茶わんをわたします。そして、おばあちゃんはお茶わんを持って言われた通り、半分くらいのご飯をふんわりしゃもじでもりつけて、おじいちゃんにわたします。すると、おじいちゃんは、いつも「この半分、多いんだよ！」ともんくを言うのです。そして、いつもおばあちゃんをあきれます。その時、ぼくはいいことを思いつき、おじいちゃんのご飯をもり直しに台所に行きました。そして、お茶わんいっぱいにご飯をもりつけしゃもじで区切り、左がわの方を落としました。これがぼくの思う「半分」です。そのご飯の入ったお茶わんをおじいちゃんにわたしました。すると「おお！こりゃあ、半分メシじゃないか！」と笑ってご飯をうけとりました。このことがきっかけで、ぼくは「半分」ということについて考え始めることになりました。

そして、さいしょに考えてみたのが「半分とは何だ」ということ。2分の1だということは分かっています。国語じてんで調べてもそう書いてありました。でも、ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんのご飯半分事件」の

ように半分の量は人によってちがうんじゃないか？と気づきました。

ぼくの家ぞくは4人家ぞくで、おとん、おかん（とぼくはよんでいます）、妹、そしてぼくです。おとんはたつぷりご飯を食べるのでお茶わんがいちばん大きいです。その次におかん、ぼく、妹のじゅんばんで小さいお茶わんになっていきます。そして、おとんはおおもりご飯、おかんはダイエットをしているので少なめです。ぼくと妹はおなかのすき具合とか体調でよくちがうことがあります。これらの量を半分にすると、おとんの半分はぼくにとつての多めで、妹にとつての半分は、おとんのお茶わんに入れるとほんの少しで、すぐに食べおわってしまいます。また、半分のしかたも人によってちがいます。ぼくのように区切る人もいれば、おばあちゃんのように「これくらいいいかな」とふわっともりつける人もいます。でも、ごはんではなく、たとえばくだものりんごを半分にすると、だいたい同じ大きさ、りょうにもなります。ぼくがさいきん毎朝食べているデラウェア

というぶどうはつぶの数を同じにすれば妹となかよく半分にできます。そんなことを思うと世の中はいろんな「半分」であふれている気がします。

今までいろいろな「半分」を書いてきました。人によってちがう半分、数や長さできっちり決められる半分などいろいろありました。うまく分けられない物でも、話し合ったりみとめ合ったりして分けておじいちゃんとおばあちゃんになかよくなつてほしいと思います。でもかいつほうとして一番へいわなのは、おじいちゃんに自分でご飯をもりつけてもらうことです。



小学生の部 優秀賞

母と私のがん戦記

明治学園小学校 五年

能美 にな

ら言われるままに触る。

どきりとした。

「ね、なんかあるよね。」

母は、あたかもなんでもないかのようにいつもと同じ声で言った。確かに。指先に固いものがふれた。皮膚のすぐ下ではあるが、胸の真ん中、胸骨と呼ばれる部位のすぐ横だ。一センチから二センチくらいで、まるっこい。固くはないが、少し弾力がある気もする。私は、使い古して転がりやすくなった、筆箱の中の小さな丸い消しゴムを思い出した。

「ね、ここ、ちょっと触ってみてよ。」
年が明けてすぐ。冬休みの宿題もおわり、始業式の準備をしていた私に、母が言った。振り返ると、自分の左の胸元を触っている。
「ほら、ここ。」

いわゆる「おっぱい」と言われる、左側の乳房を指さした。年明け早々、なんてことをさせるんだと思いが

母は医師だ。たいていの擦り傷や軽い風邪なんかがあっても、「大丈夫、大丈夫」と言いながら、ドラッグストアやスーパーでいくつか買いい物をして、私がうろたえているうちに治してしまうことが多い。この口調ならいつもと同じ「大丈夫、大丈夫」であっという間に心配なくなるのだろう。そう思っていた。

「近々、一回見てもらおうと思うの。」
母はそう言って、すぐに別の話を始めた。

数日後、仕事を早退した母と近所の病院に向かった。いつも買い物をしているお店の、道を挟んだ向かい側にあるビル。その四階にあるクリニックだ。こんなところに病院があるなんて知らなかった。受付をした後、私たちは待合室の椅子に座っていた。大きな窓から見える川は穏やかだったが、川沿いにある木は風で大きく揺れていた。しばらくすると診察室から呼ばれた。ときばきと問診にこたえた母は、今度は横になる。優しそうな女性の先生が母の胸に超音波の機械をあてていた。

「これは、大きいところで見てもらったほうがいいね。」先生は言った。母は静かにうなずき、総合病院の直近の予約を取るための手続きを始めた。あつという間の出来事のように、私は状況が良く理解できなかった。診察室を出るとき、私は先生に肩をたたかれた。

「お母さんを、支えてあげてね。」

その一言で、はっと我に帰った。悪いものってこと？ がんなの？ 乳がん？ 支えてあげないといけないような、悪い病気なの？

総合病院受診までの二週間、母はしこりの話をほとんどしなかった。私が話題にしても

「専門家に見てもらわないとわからないよ。それに専門家に聞くのが一番。」

と、笑いながら繰り返すだけ。まるで自分自身に言い聞かせているようだった。予約当日、母は一人で総合病院へ向かった。そして学校から帰った私に、

「反対側にも怪しいところがあるって。来週『セイケン』するんだよ。組織をとって、いいものか悪いものか細胞を調べるの。」

と明るく言った。それから一週間、母の口癖は「とってみなきやわからない」になった。母が妙に明るくことが、私を不安にさせた。私を心配させないように無理しているんじゃないかと思った。母が明るくしようとするほど、私の不安は大きくなった。その日の夜、いつものようにテレビをつけたら、がんによる余命が一年の人のドキュメンタリー番組をやっていた。なんとというタイミングだろう。チャンネルを変えようかとも思ったが、

意識しすぎたら負けなような気がしてそのままにしていた。乳がんの人の話。もうチャンネルを変えられなくなった。若くして、子供も小さくて、余命一年。それでも明るくふるまうその人が母と重なり、言いようのない不安におそわれた。番組が終了しても、私はしばらくテレビの前にじっと座っていた。

大雪が降った日。学校から帰ると、生検から帰った母が詳しく説明してくれた。組織をとるときにホツチキスみたいな音がしたこと、右胸は骨に近いから、痛みはなかったが骨に響く感じがしたことなど。新しいことを体験した興奮もあるのか、母は多弁だった。一方、生検後の傷は血がなかなか止まらず、胸のガーゼは真っ赤になっていた。母がガーゼを変えるたび、私は横目で母の傷を見た。数日後、母の胸は黄色と青のまだらになった。出血がキシツカして吸収されているらしい。「打ち身と一緒に。しばらくカラフル。」と母は説明してくれた。しこりを触らせてもらって、私はどきりとした。しこりの本体が大きくなっていたのだ。以前は使い古した小さな

消しゴム大だったしこりが、新品の、ちょっと大きくて高級な消しゴムくらいの大きさになっていた。皮膚の下の出血がしこりの周りでかたまっているだけだと母に聞き、少し安心した。

一週間後、生検の結果が出た。悪性だったと、母はまたしても大したことがないかのように私に告げた。テレビ番組を思い出してシヨックを受ける私。手術を受けること、来週入院になること、生検の結果あまりよくないタイプのがんであること、三週間後に予定されている私の表彰式には這ってでも行くから安心していいなどのことを、母は休む間もなく話し続けた。今更だが、完全な空元気であることが、ちょっと鈍感な私にもわかるほどだった。母の様子を見て私の不安は増した。母はパソコンをもってきて、乳がんについて私に説明した。予め準備していたようだ。標準治療とよばれる治療があること、これは科学的根拠に基づく治療で、今の時点で最良と考えられている治療であること。治療を行ったらどのような効果があり、どんな副作用がおこるのか。乳がんとい

うものを知るほど、先ほどまでであった、言いようのない漠然とした不安は小さくなった。しかしその代わりに、母ががん患者であり、治療が始まって生活が変わるかもしれないという具体的な不安が私を包んだ。これからの生活が、怖くなった。

精一杯私に明るくふるまってきた母だが、入院が近くにつれて弱気になってきた。お風呂で「この二cmで、死んでしまう可能性がある」と、急にネガティブな発言をしたりもした。かと思えば、造影CTを撮った時「全身があつくなくて、なんか、お尻のほうとかもじわっと熱くなって、ちょっとおもしろくなって感覚だった」なんて笑ったりもしていた。私が「その表現ならわかる気がする！」というと、久しぶりに空元気ではない笑い方をして笑っていた。しかしその何日後、とうとう母は「悪性かもしれないとはある程度予測していたからあんまり不安やショックはなかったんだけど、転移に関してはおわらないから不安で仕方ない」と白状した。そしてその後は、堂々と私にべたべたしてくるようになり、常

に私のほはや頭などを触っていた。

転移の有無が判明する日、一緒に行きたいと泣いて頼む祖母を私に任せ、母は夕方の外来に、一人で結果を聞きに行った。閉院の一時間後になっても母から連絡はなかった。不安が大きくなる。電話が鳴った。母は短く「転移なし。」と告げた。祖母は泣いた。私は嬉しいというよりも、ほっとしたほうが大きかった。電話から五分で母は帰ってきた。祖母が家に帰ってしまったから、いつものように母と二人でお風呂に入った。母は一言「よかった」と言った。そして、今までで一番のやわらかい表情で笑った。お風呂で手で水鉄砲をつくって飛ばしあって水合戦をして遊んだ。私は下手っぴ。母は名手。なかなか上手に飛ばせない私に、いつになく時間をかけて、母は水の飛ばし方を教えてくれた。

それから入院の日まで、母は「バツカンが怖い」と繰り返し呪文のように言うようになった。全身麻酔の時には呼吸するための管を使う。入れるときには意識がないが、抜くときには意識が戻っているらしい。プールで溺

れたことのある母は、意識があるのに呼吸が自由にならないことが何よりも怖いというのだ。手術自体よりも怖いなんとと、なんだかおかしくなってしまうた。

入院の直前まで、母は荷造りをしなかった。部屋中に買ってきた袋のまま無造作に置かれた入院グッズたちが散乱していた。入院前夜、母はしぶしぶとそれらを鞆に詰めた。私はその様子を黙ってみていた。鞆をしめた母は、パジャマ姿の私をみて、「もう一回、一緒にお風呂、どう?」と言った。私はお誘いを受け、シャワーキャップをかぶってもう一度お風呂に入った。入ったらすぐに水合戦。結局髪の毛もびしょぬれだ。あがってから思わず「楽しかったな」と言うと、「ママも」と声が返ってきた。顔を見合わせて笑いあった。

翌日、母は入院に出かけた。手続きを待つ間にも抜管が…と言っていた。面会はできないので、病棟にむかうエレベータで別れる。両側から閉まってくるエレベータの扉の間から最後に見えた母は、私の目を見ながら大きく何度もうなずいていた。泣くかなと思っていたが泣か

なかった。コロナウイルス対策のため、入院中面会はできない。しばらくのお別れだ。留守の間にはたくさんすることがある。母がいつも「徳を積んでおけば、きっと自分にいい事として帰ってくる。」と言っているからだ。まずは小学生の自分、勉強。母が退院したらびっくりするほど勉強をしておく。お手伝いもする。お風呂も一人で入る。机の片付けもする。普段母に注意されていることを自分からして、徳を積みまくる。明日の手術、うまくいくように。

手術当日、朝から雨が降っていた。窓には細い雨のあと。母も病室でこの雨を見ているのだろうか。もうすぐ三月。暖かい雨だった。きつと今日より暖かい。「手術成功お花見に行くんだ。きつと今日より暖かい。「手術成功してほしいな」と、思わず声が出た。手術が始まるころ、祖母は病院へ出かけた。大人の家族が一人だけ面会ができるらしい。帰ってきた祖母に聞いたところ、三時間くらいの手術だったようだ。直径二cm未満の『古消しゴム』のために、周りも含めて直径六cm切除したらしい。幸い

リンパ節にも転移はなく、手術としては最高の形で成功したようだ。母はというと、麻酔から覚めてすぐ、麻酔科の先生に「抜管苦しくなかったです。ありがとうございます」と元氣よくお礼を言い、祖母にも抜管の記憶がないことを開口一番に話していたという。通常運転である。手術翌日には熱が出たらしいがすぐに解熱し、張り切ってリハビリをした母は術後三日で退院した。

退院後、約束通り、母は私と東京へ出かけた。主治医と約束した通り、家でもホテルでもリハビリを欠かさなかった。ぐるぐると腕を回したときに見える母の胸は、リンパ節を探すために入れたらしい色素で青々としていた。一週間後、ゆっくりとだが母は両手を同じくらいに挙げるができるようになった。

次は化学療法が始まる。いわゆる抗がん剤だ。手術でがんは取りきれたが、再発予防のための術後療法が必要らしい。二種類の抗がん剤を四回ずつ、合計八回。抗がん剤が始まると抵抗力が落ちるので、絶対に外から感染症を持って帰らないように私も注意しなければならな

い。抗がん剤がスタートしてすぐ、母は体調を崩した。吐き気がひどく、トイレにこもる。しかし、食欲はあり、定期的に焼き肉を食べたくなるらしい。ステロイドの効果じゃないかなと母は言っていた。職場の理解もあり、仕事には変わらず行っていた。休憩しながら、できない仕事は代わってもらいながら、どうにか折り合いをつけながら母は『日常』を続けようとしていた。普段からよくしゃべる母がじっと一点を見つめて黙っているのは私にとつてすでに非日常の世界ではあったが、私も普通通りふるまえるよう、努力していた。二週間くらいたったころ、母の髪の毛が抜け始めた。歩くたびにらはらと抜ける。櫛を通すと、ごっそり髪の毛が付いてくる。痛みはないらしい。やがて歩いて風が当たるだけでも髪の毛がふわりと抜け落ちるようになった。母が動いた後は髪の毛がいっぱい落ちているので、まるでヘンゼルとグレーテルのようだった。抜けた髪が家中に散らばるのを防ぐため、母は医療用のウィッグを使い始めた。そしてその日を最後に、母は私とお風呂に入るのをやめた。母の体

調が良い日には、川べりを二人で散歩した。もう季節も終わり、花を落としている木蓮の木を見上げて、母は「ママの頭っぽいね。すかすか。でも残つてるところはしっかり残つてる」と言つて笑つた。私はなんとなく笑えなかつた。隣の淡い緑色の葉っぱがまばらに出てきている木蓮を指さして、「あんな風に生えてくるよ」というと、母は「いいこと言つてくれるね。」とおどけて言つた。

抗がん剤治療は五か月続いた。治療の前日になると、母は嘔吐するようになった。薬も入れていないのに不思議だなと思つていたら、『予期嘔吐』というものらしい。体が無意識に、治療を怖がり拒否しているのだ。薬を飲むことで抑えられるが、この薬、かなり眠くなるようだ。母は服用のタイミングを主治医と相談し、前日の夜と治療当日の朝に内服することに決めた。飲む前には必ず私に「これから薬を飲むのでママの営業を終了します。」と宣言。私もなるべく母にお願いする用事は早くすませる癖がついた。

髪の毛は、あれからどんどん抜けていった。元の毛量

が多いからなのか、あまり地肌は見えてこなかつた。ウィッグをかぶる理由は抜け毛の掃除が大変だからだと母は言つた。気になる副作用の第一位は脱毛だとなにかで読んだのに、母は髪のない頭を嘆く様子をみせなかつた。もともとコスプレを趣味にしている母は、抵抗なくウィッグ生活に移行していた。それどころか、治療が終わつたら、今までに挑戦できなかった坊主頭のキャラクターのコスプレをしようという計画まで立てていた。母がこたわつていたことが一つだけある。それは「髪を剃らない」ということだ。いよいよ地肌のほうが多く見えるほど脱毛が進んだころ、祖母が髪の毛は剃らないのかと聞くと、母は強い口調で拒絶した。私は不思議に思つた。テレビなどで見るがん患者さんは、ある程度脱毛すると剃毛していたからだ。母に聞くと「必死ですがみついて頑張っている髪の毛だ。最後まで残つたら、それは『かみさま』としておまもりにする」とよくわからない理屈を言つた。なんだかよくわからないが、強く決めていたようなので私も祖母もそれ以上突っ込むことをやめた。

「ごはん、おいしくないよね。」ある日の夕食時、意を決したように母が言った。私は答えた。「うん。最近のご飯はずっと、味がおかしい。」そうなのだ。抗がん剤が始まってしばらくして、母の作る食事の味がおかしくなった。舌がピリピリするとは聞いていたが、おそらく味覚にも影響していたのだろう。心配させないよう、私も頑張って完食していたのだが、結構つらかった。母はシヨックを受けたというよりも、確認作業に満足した様子だった。それからはレシピ通りに分量を量りながら調理をしていたものの、一週間ほどであきらめ、外食、お惣菜、祖母の手作りというローテーションを繰り返す生活になった。

抗がん剤スタートから三か月。最初の薬がおわり、次の薬が始まるころ。母の頭を見ると、なんとなく、縁取りがあるような気がした。近くによってよく見ると、産毛のような細い毛が生えてきている。このとき、母の頭にはまだまだ「かみさま」が複数いた。主治医に聞いていたよりも早く、母の髪の毛は復活し、生え始めたのだ。

予定していたコスプレの計画書を破棄し、母は真面目な顔をして「頭皮を痛めなかったのもよかったのかもしれない。かみさまたちがいるから、周りの毛根も生えなきゃって思ったのかもしれない。」と、医療関係者とは思えない理屈を言った。梅雨から夏にかけての暑くなる季節だったので、髪の毛が少し生えたのをこれ幸いと、母は家の中でウィッグを脱ぐようになった。さらに、ある日スーパーから「同志をみつけた」と喜んで帰ってきた。買い物袋の中には、キウイ。たしかに。色と言い、毛の長さといい、そっくりだ。それから母は自分の頭を「ゼスプリ^{アル}®」と呼ぶようになった。全く明るいもんだ。けれどその明るさは以前のような空元気ではなかった。髪の毛を明るい話題にできるほど、毛根と一緒に母も元気になってきているようで安心した。そして母は「ゼスプリ^{アル}®は、オナモミを指します」と宣言した。それから続けて「最近まで頭もボディソープで洗ってたの。首との境界もよくわからないし。でも、もうこれからはキューティクルを守るためにシャンプーに戻す。そして伸び

たら、赤ちゃんみたいに切った髪の毛で筆を作る。」とまたとんでもない発言をして私を驚かせた。元気な時はこのような発言ばかりの明るいい母だったが、抗がん剤の治療日にはやはり判を押しのように体調を崩した。まるで芸人と病人の、二人の母がいるようだったが、母は無事に、抗がん剤治療を終えた。

三週間後、放射線治療が始まった。今後は痛くもかゆくもないらしい。本当に、母は何事もなく帰ってきたく、ものの十五分足らずで終了したそうだった。抗がん剤と比べると、あつけないほどだ。決まった位置に照射するので、体に線を引いたそうだった。ちよつとプラモデルのパーツになった気分と言っていたが見せてはくれなかった。これから三週間毎日の治療が続く。今まで仕事を続けていた母だったが、毎日の治療ということで、思い切った療養の長期休暇をとることにした。母があけた仕事の穴は、市外から『応援』が来るらしい。事前に申請していた治療スケジュールから少しずれてしまったが『応

援』は問題なく来てもらえるそうだった。娘の私から見ても、理解のある恵まれた職場だと思った。放射線治療二日目、母は抗がん剤治療の名残でパンパンに顔がむくんでいたが、無事に四十歳の誕生日を迎えた。夏休みがおり、登校していく私と入れ替わりに、母は治療休暇に入った。放射線治療のための休みとはわかってはいたが、私は帰宅した時に家に母がいることがうれしくてたまらなかった。味覚も戻ったらしく、母の手料理を食べることもできるようになった。最高の三週間を過ごした。

こうして母の、乳がんの標準治療はすべて終了した。外来受診日、病院からの帰り道、うだるような暑さの中で、母は言った。

「次の診察は二月だよ。寒いから、もうちよつと毛が生えてくれると助かるなあ。」

私達は、大きくなってすっかりした葉をつけて茂っている、あの時の木蓮の木陰に立っていた。汗ばむ中、母は言った。

「久しぶりに一緒にお風呂、入ろうか。」

がんの診断から治療終了までを一番近くで見て、将来はがんに携わる仕事をしたいと思った。がん検診の啓発や、新しい診断方法、副作用軽減の薬、食事のサポートなど仕事は多岐にわたる。中でも、親ががんの診断を受ける前に、がんの正しい知識を子供に広める活動をした。子供は親のことをよく見ている。得体のしれないものに自分の親が襲われているという恐怖は計り知れない。正しい知識を持つことで病気を知らないことによる恐怖を、少しでも軽減できるかもしれない。

あの日から半年ちよつと。母にがんが見つかった時は、絶望を感じた。しかし、発見も早く転移もなく、命に関わる副作用もないまま治療を終えることができた。私は今まで通り学校生活を送れているし、母はもうすぐ仕事に復帰する。家族にがんが見つかってなお、生活を変えずに済んだ幸運を私は確かに感じている。一方で、二人でこれから再発におびえながら暮らしていかなければいけないこともわかっている。しかし今はこの幸運を

抱きしめて、次につなげて、生きていたい。



小学生の部 優秀賞

初めての体けん

LC A 国際小学校 三年

喜多 結理

7才のくみちゃんは一人で立ったりすわったり出来ない子だった。わたしはきんちようして

「こんにちは」

と、小さくあいさつをした。びょういんは学校の教室の半分くらいの大きさで、かべはやさしい黄色で、花火の絵がかざられていた。そうぞうしていたより人が少なかつた。

7月23日、初めてのボランテアにチャレンジした。びょういんで、びょう気の子どもたちに、ごはんをあげたり遊んであげたりする子どもボランテアだ。電車に一つだけのつていった。その日はすぐくあつくて、駅からアイスパックで顔を冷やしながら向かった。

びょういんに着くと、2才と7才の女の子がいた。2才のちかちゃんは、のどからこきゅうきをつけていて、

まず、小さな白いバスタブにはだかのちかちゃんがすわり、かんごしさんがちかちゃんの体を水で流した。バスタブに少しだけ水をためて、ちかちゃんは、星や丸の形のカップのおもちゃで遊んでいた。わたしがカップの中に水をいれてわたすと、ちかちゃんはりょう手で開けて水をばーって出す。空になったカップをちかちゃんが水にすずめて手をはなしたら、ぶかっと上にもどつてきた。ちかちゃんは声は出せないけれど、口をあけて目を丸くしていた。わたしはよろこんでいるように感じた。

その後、バスタブの水を少なくして、かんごしさんがちかちゃんをあお向けにねかせて頭にシャンプーをつ

けて洗った。わたしはおぼれないか心ぱいになった。かんごしさんは、気管支のチューブに水が入らないように、ゆっくり手を動かしていた。ちかちゃんは、お湯が気持ちよいか、あくびをして手で目をこすりねむそうだった。ちかちゃんは、チューブがさんそボンベから外れたままでねてしまうと命に関わるので、かんごしさんはちかちゃんに

「ここでねちゃだめだよ」と言っていた。

次に、ちかちゃんとおままごとをして遊んだ。ちかちゃんはおもちゃのおなべの中に、にんじんとブロッコリーと茄子とドーナッツを入れてかきませた。ご飯の時間が近くなり、わたしが

「一緒にかたづけよう」

と言ったら、ちかちゃんは、わざとおもちゃを一つずつかんで全部出してしまった。わたしがそのおもちゃを袋に片付けたら、ちかちゃんはまた出した。何度かくりかえしてようやく全部片付けることが出来た。

わたしはそんなちかちゃんがかわいくてあたたかい気持ちになった。

次に、くみちゃんにご飯をあげるお手伝いをした。ご飯の時にになったら、かんごしさんがくみちゃんをだっこして車椅子の上に座らせた。この日のお昼ご飯は、白ごはんとハンバーグ。わたしは、いつも自分が一口で食べるりょうの半分くらいずつ、スプーンに乗せてあげた。くみちゃんは目が見えないから、まずくちびるにスプーンをあてて、くみちゃんにご飯があることを伝えた。くみちゃんはふつうの水をのむといっぺんにのどに入ってしまう。くみちゃんが自分のペースでゆっくり飲むように、水をスプーンみたいにとろとろにしたものをあげた。ご飯を食べているとき、くみちゃんは口がニコってしていた。おいしそうだなとおもった。

ご飯の後、ちかちゃんはマットの上でねていた。ねている時は、きかいつながったチューブが外れないようにかんごしさんがそばですつと見ていないといけない。きかいの画面に番号が2つ付いていて、右の数字が九十

より下になってしまったら、こきゅうがうまくできていないしょうらしい。何度も数字が下がってしまい、きかいからピーピーと音がして、かんごしさんがちかちやんのどののチューブを動かして、音がきえて数字も一〇〇くらいになるのをくりかえした。その間ちかちゃんはずっとねていた。かんごしさんがその場をはなれたりする時、わたしは、大丈夫なのかなとこわかった。

ボランティアが終わってびょういんを出たら、外は土砂降りの雨で、かさがなかったから走ってえきにむかった。終わってほっとした。家にいる犬のアンに会いたくなかった。

小学生の部
選考委員特別賞



あさのあつこ賞

自分が自分へ

板橋区立向原小学校 六年

川名 岳大

おれが学校に今行っているのは奇跡かもしれない。一年生のおれは学校が大嫌いで六年間という学校生活の長さはほぼ永遠だったからだ。

今からちょうど六年前まだ未就学児の時、学校に入るための検査を受けに行った。いきなり母とはなされて見知らぬ人と見知らぬ場所に連れて行かれた。みんなきちょうしていたのかだまっていた。白黒写真の様だった。

学校にはあまりいいイメージをもてなかった。

いよいよ四月になりおれは学校に入学した。登校は両親もいっしょだったため手をつなぎごきげんだった。その時は学校がいいとも悪いとも思わなかった。

最初のうちは筆箱等の道具の使い方ならったり学校でのルールをならったりと簡単なものだった。授業の間も短いし母も学校にむかえにきていたため、余裕ある毎日だった。友達も順調に増えてきていたので少し楽しかった。

ある日母が学校へのおむかえに間に合わず通学路の途中の公園で会った。おれは会ったしゅん間ギャン泣きした。家に帰ったら「お母さんに会うまではなみだが押して来るのをがまんしてた。」

と自慢した。そして

「岳ちゃんだけのお母さんになあれ☆」

と魔法をかけた。

それなのに母が次の日むかえには来たものの

「お母さんはおむかえにもうつかれたんだよ!!これから一人で学校から帰って!!」

とキレた。次の日から母は学校にむかえにこなくなってしまうた。

このときはぼんやりとした不安のかげがはつきりこくなつた。

四月の終わりに発熱し二日間の病休になつてしまつた。その間母と一緒に遊んだり、テレビを見たりごきげんだつた。夜になるとパーティーをするとおれがいい部屋の電気を消してしまつた。そして真つ暗な中で板に絵本をたてかけ懐中電灯で照らし映画だといつてはしゃいだ。ほかにも暗い中で食事をしたりダンスを散々した。そうしたら休み明けの日、学校に行きたくなり姉と父にはげまされどうにか行つた。姉が心配し休み時間教室に来てくれたり、一緒に帰ってくれたりしたため少少きげんが直つた。

そのあとゴールデンウィークにはいった。ゴールデンウィークが明けたころますます学校が嫌いになつた。そ

して朝はなかなか起きず、着替えもせず、ごはんも自分では食べなかつた。このころ毎日明日は学校に行きたくないと言ひねるのもおそくなつていた。本格的な学校嫌い突入である。学校へとてつもなくストレスを感じ腹痛や頭痛がおきるようになった。頭痛がひどい時は学校を休むこともあつた。けれども家にいるとストレスを感じなくなり元氣にしていた。学校に行く日にはアイスを食べさせてもらつたり、体育をやすんでもいいと連らく帳に書いてもらつたりしてなんとか行つていた。

夏休みに入り楽しいこともあつたがプール教室に行かされストレスが増えた。八月の終わりに再び学校が始まつた。そして学校がさらに嫌いになつた。そのせいで妹がのろろしているだけで怒つたり一緒にいるだけで怒つたりした。コウモリ観察会に行つた時は母と二人で行く予定だつたのに妹が急に行きたいと言ひだしてついてきやつたから母と三人で乗っている自転車をゆらしてやつた。妹と一緒に出かけることになつただけでいやだといつて出かけなかつたりもした。つまり妹が大嫌いに

なったのだ。そのときのおれの妹は母を取り合うライバルでしかなかった。

そして朝はベランダで

「学校には行かないぞー!!」

と大声でさげんだり、

「学校に行かせるなら自殺してやる!!」

と周囲に聞こえる大きさの声でいった。でも実際は九割ぐらいは自殺する気はなく(母・一割はあったの!?)母をあせらせて判断をにぶらせることで学校に行かなくたいいよといわせるのが目的だった。さらにはイスを思いっきり力の限り投げつけて学校に行かせようとする母をこらしめた。

ある日やっぱり学校にいくのが嫌で時間が遅れて母が送ろうとした時ダダッと階段をかけたししげみの中に隠れた。その時間は何と一時間程である。その間母は探すのを一回諦め妹を保育園に送りに行きその間近所に住んでいた祖母がずっと探していたそうだ。母は帰ってきたらけい察へ届けるつもりだったそうだ。だけれどもおれ

は嫌な予感がし自らでてきた。

ストレス等のため夜も眠れなくなった。その時おれは大声でさげんだり、おどったり、家具の配置を変えたりした。家具の配置を変えたりした時はあまりにもうるさかったため近所の苦情を恐れ、午後十一時半ごろに父が近所の公園に連れていった。

おれがエスカレートした行動を続けたために母はがまんの限界がやってきた。そして精神科に勤務したことがある小児科医の元へつれていかれた。先生は

「次の日が学校の時は早くねないと!!」

とアドバイスをくれた。正直なことをいうとこれは両親やあるいはおれの妹でもいえそうなことだと思った。けれどもこのことをいっている人が医者と明確な地位だったためやたらと、

(なーるほど!すごいな〜!!)

と思った。その後先生は薬(漢方薬)を処方してくれた。けれども元からする行動がひどすぎたためあまりよくならなかった。

ある時病気や風邪ではないのに三十八度八分という高熱になった。けれども実質熱があるだけだし土曜日だったということもあり元気に公園で遊びまくっていた。先程の先生によると自律神経失調症であるらしい。簡単に説明すると眠い、眠くない、とか体温が高い、低い等がコントロールできなくなってしまうものらしい。

学校の先生はおれが学校で楽しくやっていると母にかたっていた。実際のところはめんどくさい、だるい（おおざっぱにいうと）などあまりいいことはなかった。友達と話せば楽しいけどそれだけで学校が楽しいとはとても言い切れないと思った。授業はめんどくさいけれど次の学年のために最低限は勉強する必要があると思いつけるしかなかった。集中力を消もうするそうじは自分への印象が悪くならないようにこれも少しはやった。やりたくもないことを無理してやるのはつらくけい続してやるのは不可能に思った。

自分がこのままでは壊れてしまう。どうにか対処するしかない。そう思った。そこで学校を遠回りに家と思う

ことにした。家ではふんだんだったらせまい場所（ふとんに頭ごとくるまつたり等）にいるのがおれだった。授業は軽く頭にながしながら聞いた。そして机の下に隠れることにした。時には後ろを向いたり気がむかないときはそうじをせず（ほぼ必ずだった）、嫌いな音楽や体育はねてしらないふりをした。効果は…なんとバツグン。おれがあまりにも授業をうけたがらないのが毎日だったのでみんなあまりおれのことを気にしていなかったみたいだった。これはもう勝ち組そのものだ。気付けば十二月ごろには学校に行っていた。二年、三年、四年、五年と学校へ続けて無事通った。

そして今も学校へ行っている。今の先生はおしゃべりな先生で授業中等に脱線して休日等の話をしている。心によゆうができたためそうじをしたり席についてしっかりと授業をうけている。次の中学は苦しい所だと母や姉にいわれているので自分らしさ全開でがんばりたいと思う。



小学生の部
選考委員特別賞
最相葉月賞

たいは、なぜ赤いのか

大阪市立阪南小学校 二年

立山 怜佳

きよ年の六月に、大さかのはん南しで、すだてりよう
体けんをしました。海の中に、竹とあみをつかつて丸の
形を二つつなげてありました。それがすだてのあみです。
そのすだてのあみの中に入って、手にもったたもあみで
魚をすくうりようです。わたしは、水ぎとマリンシュー
ズにきがえて、わくわくドキドキしながら海の中に入り
ました。

一番記おくにのこっているのが、わたしが一番大きな
たいをとったことです。大きいたいをねらってすくおう
としますが、なかなかとれません。りようさんがきよ
う力してくれて、なんとかたもあみですくえました。し
かし、たいは、おびれを大きくうごかします。きらきら
とたくさん水てきをはねあげながら、一生けんめいに
にげようとします。おもたいし、あばれるのでたいへん
でした。その時のたいは、うろこ一まい一まいが赤色と
うすいピンク色がまざった色をしていました。きらきら
でわたしのもっているティアラよりもかがやいていまし
た。とてもきれいに見えました。家ぞくといっしょに、
ほかにも石だい、あじ、ベラなどいろいろとありました
が、こんなにきれいな色の魚はいませんでした。

この時に『なぜたいは、こんなにきれいな赤い色なの
か』とふしぎに思いました。

それで調べてみることにしました。わたしは、『フラ
ミンゴといっしょで、たべもので赤くなっているのでは
ないか』とよそうしました。

まず、図書館で調べてみることにしました。本がた
くさんあるから、バスと電車にのって、市内で一番大き
な図書館に行きました。つくとそうだんカウンターに
行って、し書さんにそうだんしてみました。

「たいはなぜ赤いのかを調べたいです。わたしが読める
本でおねがいます。」

わたしは言いました。し書さんに聞かれました。

「何才ですか。」

「七才です。」

し書さんは、パソコンでいろいろな子どもむけの本を調
べてくれました。そのリストをもって、本だなをさがし
に行きました。

教えてもらった図かんを見て、わたしがとつたたいは
『マダイ』だと分かりました。わたしも、自分で魚や生
ぶつの本を次々にさがして読みました。すると、書いて
いる本を見つけました。さかなクンの本でした。『さすが、
さかなクン!』と思ひながら読みました。

『マダイは、エビるいがこうぶつです。エビはゆでたり

やいたりすると赤くなりますね。赤いものもとはアス
タキサンチンというせいぶんです。エビるいをたくさん
たべるため赤くなると言われています。』(さんこう①)
これでなぜ赤いのが分かりました。でも、つづきに
こんなことも書いてありました。

『サケのなかまもエビるいとおなじこうかくるいのオキ
アミなどをたくさんたべるため、み(おにく)のいろが
赤くなります。』(さんこう①)

ちよっと『あれっ?サケは身が赤くなるの?』とふしぎ
に思いましたが、いっぱい本を読んでつかれたので、魚
とフラミンゴについての本をかりました。いっぱい本を
かりたので、おもたくなってきた、と中でいちごパフェ
を食べて帰りました。上につけていたいちごのアイスク
リームがおいしくてやる気がいっぱいになりました。

次の日から、家でかりた本を読みました。さいしょは、
さかなクンの本からです。

『サケのみのいろは赤っぽいいろなので、マグロるいや

カツオのような赤みのおさかなとおもってしまいますが、じつは！マダイやヒラメなどとおなじ白みのおさかな。サケのみやたまご（いくら）の赤いいろは、アスタキサンチンという赤いいろのもとをもったオキアミやヨコエビなどのこうかくるいをたべてとり入れたものなのです。』（さんこう②）

わたしは、サケがマダイと同じようにアスタキサンチンという赤い色の元をもったものを食べて赤くなっていることにびっくりしました。さらに、ぎ問が出てきました。サケはかわがぎん色でみが赤なのに、マダイはかわが赤くてみが白です。わたしは、サケもよく食べるから赤いみだと知っています。また、マダイはすだてりようでとったものをおさしみにしてもらいました。生まれてはじめて食べたおさしみだったので白いろだったのをよくおぼえています。

なぜ、いっしょのものを食べているのに、赤くなる場所がちがうのかが、ふしぎでぎ問がふえました。

さらに図書かんの本を読んでききます。

『エビやカニには赤いいろのせいぶんがたくさん入っているの、それらをたべたマダイもあざやかな赤いろになるのでギョざいます。ふかいうみでは、赤はくろく見えるため、こわいてきに見つかりにくくなるといわれています。』（さんこう②）

『これだ！』と思いました。ほかの本でもたしかめました。ただ、さかなクンがいいの本は、わたしにはとてもむずかしかったです。ちょっと読むのがしんどくなってきました。

『さかなの目にはいろが見えるの？さかなは青が見えやすく、赤が見えにくいといわれています。赤い体をしているさかなのほうがふかいうみの中では目立ちません。』（さんこう③）

地上では、赤色はとても目立つし、しょうぼう車なんですぐわかるのに、赤色がふかい海では目立たないというのがとてもふしぎでした。『さかなからはカメレオンやにんじやみたいにまわりにとけこむ感じに見えるのかな』と思いました。目立たないのでほかのさかなにもお

そわれにくいんだなと思いました。

次に、タイがどこにすんでいるのか本で調べてみました。

『水しん二十〜二百メートルのがんしょうのしゅうへん。』(さんこう④)

どれくらいふかいのか分かりません。お母さんに聞きました。

『水しん二十メートルや二百メートルがどれだけふかいのかわからないの。』

そうしたら、お母さんが、

『高いビルにつれていってあげる。』

と言って、あべのハルカスにつれて行ってくれました。

『海のふかさをきいたのに、高いビル?』とふしぎに思いながらついて行きました。

あんないのお姉さんに聞くと、あべのハルカスが三百メートルあると教えてくれました。それで、入っている所まで、エレベーターに乗ってのぼりました。百メートルのちょっと上の所です。エレベーターホールから下を

見ると地めんの人や自てん車がとても小さく見えて、楽しかったです。

お母さんが言いました。

『地めんを水しん二百メートルと思ってね。そうしたら、地めんから今いる場所より少し上のかいくらいまで、マダイが泳いでいるよ。このへんもマダイが泳いでいるね。』

わたしは、『地めんの人があんなに小さく見えるから、マダイだったら小さすぎて見えない。』と思いました。とってもふかい所を泳いでいることが分かりました。また、『いきがしたくなったらどうするのか。』なんて心ばいになりました。

次に、フラミンゴについても本で調べてみました。

『フラミンゴのなかまは、うつくしいピンクいろのはねをもつ。じつはヒナのときは白っぽいねなのだ。ヒナはフラミンゴのおやが出す真っ赤なミルクをのむ。これのみつづけると、体がピンクいろにかわるのだ。赤い

ミルクにはおやがたべているプランクトンにふくまれている赤いしきそがふくまれている。』(さんこう⑤)

『フラミンゴは生まれたときはまっ白だけど、カロチノイドというしきそがふくまれたもをたべることで、体がピンクいろになります。』(さんこう⑥)

フラミンゴについては、だいたい思っていたとおり食べもので赤くなっているということが分かりました。

『たいは、なぜ赤いのか。フラミンゴが赤いのおなじではないか。』については、本で分かったことは、一つ目は、『アスタキサンチンという赤いせい分をふくんだエビやカニをたくさん食べてマダイは赤くなること』でした。これはだいたい思っていたとおりでした。フラミンゴといっしょで食べもので赤くなるというのも思ったとおりでした。二つ目は、『ふかい海では、赤色の方が目立たないこと』でした。これは知りませんでした。これで、マダイがなぜ赤いのが分かりました。

次に、『おなじエビやカニなどアスタキサンチンをふ

くむ食べものを食べているのに、なぜサケとマダイでは赤くなる場所がちがうのか』について調べてみました。かりてきた本を読んでも分かりませんでした。ちがう図書かんの本でさらに調べることにしました。あまりにも分からないので、『白身と赤みの魚』について調べてみました。

『みのいろは、はったつしているきんにくのちがい 赤みざかなと白みざかなではおよぎ方にちがいがあり、はったつしているきんにくもちがいます。

みが赤いざかな イソマグロ たとえるならりくじょうのちようきよりせんしゆです。ながい時間にいっていの力を出しつづけるきんにくは赤く、赤みざかなはちようきよりをおよぎつづけるのがとくいです。

白みざかな エビスダイ たとえるならりくじょうのたんきよりせんしゆです。いきんでしゆんかんてきにつよい力を出すきんにくは白く、白みざかなはたん時間にすばやくおよぐのがとくいです。』(さんこう⑦)

わたしが知っているサケは、川で生まれて海に出て、

海を大きく回って生まれた川に帰ってきます。この本を

読むと、サケは、白身魚なのに長きよりを泳ぐ赤身魚みたいですよ。なにかすつきりとしません。

そんなときは、次の本です。サケを調べてみました。

『サケのみは赤みそれとも白み？ サケのみが赤く見えるのは、かつどうのエネルギーげんとしてきんにくにくいわえられたしぼうが、赤いしきそをふくんでいるためです。赤みのさかなであるマグロのように、きんにくが赤いしきそをふくんでいるためではありません。さんらんをおえたサケのみが、しろっぱくなることからわかるように、サケは白みのさかななのです。』(さんこう⑧)

赤身魚はきん肉に赤い色そをふくんでいるから。サケはマグロみたいにいっぱい泳ぐので、白身魚だからきん肉ではなく、きん肉にたくわえたりしぼうに赤い色そをもつことでエネルギーにして泳ぐことができるのかなと思いました。

これでサケの身が赤いのは分かりました。でも、マダイのかわが赤いのがわかりません。サケだけがとくべつ

なのかなと思いました。

本だけでは分からないことがあったので、くわしそうな人にも聞いてみることにしました。水ぞくかんかはよく物かんかどちらに聞くかなやんで、いつも行っているしよく物園のとなりにある、魚もてんじしているはく物かんに聞いてみることにしました。大さか市立自ぜんしはく物かんです。聞きたいことをメモにして、ものすごくドキドキしながら電話をかけました。とてもさんちょうしてこわかったです。女の人がかけてくれました。わたしは、一生けんめいに『マダイはなぜ赤いのか』など質問があるので教えてもらえるか聞いてみました。メールをおくつたらくわしい人が、時間がかかるけど教えてくれることになりました。ほっとしました。調べた内ようや考えたことを入れてメールを書きました。時間がかかったけど、メールができたのでおくりました。『やっとおくれた。』と思いました。

しばらくすると、メールで返事がとどきました。すご

くいつぱい回答を調べて書いてくれました。わたしは、そのりょうにびつくりしました。マダイが赤いことについて四つに分けて書いてくれました。

一つ目は、『どんな仕組みで赤いのか』です。これはわたしが調べた『アスタキサンチンが入ったエビやカニをたべているからで正しい』と書かれていました。さらに、『アスタキサンチンは自分で作ることができないこと、また、アスタキサンチンをふくまないえさを食べているマダイは赤くならず、黒っぽくなる』と書かれていました。

二つ目は、『どんなメリットがあるか』です。わたしが調べたときからおそわれにくいという理由のほかに、『タイがほかの生き物をえさとして食べるときにもやく立っている』と書かれていました。

三つめは、『成長するにつれてどんなふうにならなっているか』です。『赤ちゃんは、はじめはとう明で、大きくなって大きなエビやカニを食べられるようになって』

きたらアスタキサンチンをとり入れることができるようになって、三センチくらいから、赤色の色をもつようになる』と書かれていました。

四つ目は、『れきしの中で、いつどのようにそうなたか』です。『マダイに近いチダイやキダイは赤く、少し遠いヘダイやクロダイは赤くない。マダイのグループとヘダイのグループは七千から五千万年前に分かれて、その後マダイのグループは赤くなるというくとくちょうを手に入れた』と書かれていました。

三つ目と四つ目は、わたしが調べた本では分かりませんでした。そんな考え方もしていませんでした。

次に、マダイとサケのちがいについて書いてくれました。

わたしの調べた内容はだいたい正しいと書かれていました。『マダイなどの多くの魚は、アスタキサンチンなどのカロチノイドのほとんどをかわやひれに持っていて、サケがとくべつで、ほとんどのアスタキサンチンをきん肉の部分にもっている』と書かれていました。さらに『サ

ケは、海から川にどうして、たまごを生む時になると、アスタキサンチンがきん肉からかわにうつって、さらにルチンというせい分にへん化する』と書かれていました。やっぱりサケがとくべつなんだと思いました。

『ごうかな？』って自分で答えをよそうして、たくさん本を読んだら読むだけ理由が分かかってきて、またはく物かんの人に聞いたりして、はじめ自分一人ではよそうしていた内よいじょうように、理由があつてだんだん調べるのがわくわくしてきて楽しくなりました。まるでいろいろなヒントで間だいをかいけつするたんていをしているような気になりました。

タイが赤い理由は、『アスタキサンチンという赤いせい分をふくんだエビやカニをたくさん食べてマダイは赤くなること』、『赤ちゃんのときは、とう明だけど、大きくなってエビやカニをたくさん食べるようになったら赤くなること』です。さいしよにわたしがよそうしていた

とおりフラミンゴといっしょで小さいころは赤くなくて食べ物で赤くなっています。あと二つは『ふかい海では、赤は目立たないため、てきにおそわれにくいこと。また、タイがえさをとるときにもゆうりなこと』、『同じタイでもれきしの中で、赤くなるというとくちょうを手に入れたこと』です。また、途中で出てきたサケのちがいがもサケがとくべつなんだと分かりました。

わたしのぎ間は、ぶじかいけつできました。マダイは生きていくために、長い時間をかけて赤くなるというとくちょうを手に入れたことが分かりました。マダイの赤い色は、いのちがかがやいているのだと思います。マダイは、赤くてきらきらときれいで、おいしくてわたしにとって、一番の魚です。

*さんこうにした本

①ギョギョギョ！教えて！さかなクン、さかなクン、朝日学生新聞社

②ギョギョギョ！教えて！さかなクン②、さかなクン、

朝日学生新聞社

③ なぜ？のずかん さかな もとむらひろゆき、学研プラス

④ 小学かんのずかん NEO POKKETネオぼけつと3 さかな、いだひとしほか、小学かん

⑤ ふしぎなせかいを見てみよう！すごいどうぶつ 大ずかん、げこしようじょう、たかはし書店

⑥ いろのまなびじてん2 いろのふしぎ、もぎかずしほか、ほしのわかい

⑦ しんそうばん さかなのクイズずかん、ちばひろあき、学研プラス

⑧ ポプラディアじょうほうかん さかな・水のせいぶつのふしぎ、いだひとしほか、ポプラ社



リリー・フランキー賞

こくらのきりだんす

愛媛大学教育学部附属小学校 一年

若狭 早

さいしよにおぼえた町の名まえは、こくら。ぼくのしんせき「こくらのおばちゃん」がすんでいる町だ。こくらのおばちゃんは、ぼくのひいおばあちゃんのいもうとで、こくらでごぶくやさんをしていた。きものすがたがとてもきれいで、きせつごとにひらかれる「てんじかい」の人氣ものだったそうだ。いまはおとしよりになったので、みせじまいをして、こくらでのんびりすごしている。

「のこったきものといっしよに、きりだんすをあげるね。みんな、うちまでおいでね。」

こくらのおばちゃんが、ぼくのおかあさんにきものときりだんすをゆずってくれることになった。それでこしらのゴールデンウィーク、ぼくはおとうさんおかあさんといっしよに、こくらまでいくことにした。

五月二日、木よう日、よる九じ五十五ふん、えひめのみなとからフェリーでしゅっぱつ。こんなよるおそくにおきているのはじめてで、ぼくはワクワクした。ねるところは二かいだてのベッドで、はしごをつかって上のベッドに入った。ばおおお、ばおおお、というエンジンの音をきいていたら、ぼくはすぐねてしまった。スピーカーから、

「おはようございます。まもなく、こくらこうにとうちやくします。」

というほうそうがながれて、びっくりした。もうあさだ。おとうさんの車にのって、まずはきっさてんにむかった。五月三日、金よう日、七じ三十ふん、きっさてんであ

さごはん。とてもぶあついフレンチトーストにシロップをたっぷりかけて、ぼくは大人よりのあざごはんをほとんど一人でたべた。それから、こくらのおばちゃんのおうちへ。まえにきたときは小さかったから、どんなみちをとおったのかおぼえていなかった。だからこんかいは、しっかりとおぼえようとおもって、車のまどのそとをよく見ておいた。おうちにちかづくくと、だんだんなつかしいみちになってきた。

五月三日、金よう日、八じ四十ぶん、こくらのおばちゃんのおうちにとうちやく。

「よくきてくれたね。さあ、おあがりね。」

げんかんのボタンをおすと、げん気なこえがきこえた。おとうさんがたくさんのおみやげを車から出していたので、ぼくはそのお手つだいをしてからおうちにいった。ひいおばあちゃんから、もっていくようにたのまれたおみやげは、なんと大きなだんボール二はこぶん。えひめのしんせきがつくったおこめ三十キロ。にんじん、トマト、キャベツなどのおやさいを山もり。おかあさんがゆ

でた、たけのこ。おそなえよのくだものとおかし。そして、ぼくがかかえきれないくらいたくさんの、さや入りそらまめ。おみやげをよろこんでもらえて、ぼくもうれしくなった。

おぶつだんにおそなえものをして、ぼくとおとうさんおかあさんでおせんこうをあげた。かざっているしゃしんは、こくらのおじちゃん。ぼくが生まれるずっとまえに、びよう気でなくなったそう。手をあわせてごあいさつすると、わらったかおのしゃしんがもつとにっこりしたような気がした。おまいりがおわると、みんなでおちゃをのんだ。ぼくが小学生になったこと、まえにきたときより大きくなったことをほめてもらえて、ぼくはもつともつと大きくなろうとおもった。

「さあ、そらまめむきのお手つだいをしてくれる人はいるかな。」

おかあさんがそうだったので、ぼくはすぐ手を上げた。まずはしんぶんしをひろげて、その上にさや入りそらまめをおいた。つぎに大きなさやから、中のそらまめをど

んどんとり出した。ぱきっ、しゅしゅっ。さをわると、なんだか青いにおいがした。そらまめはみどりいろなのに、ふしぎだ。そして、からになったさやの山にくらべるとそらまめの山がかなり小さくて、ぼくはそれもふしぎだった。

五月三日、金よう日、十じ、にもつはこびのおにいさんがとうちやく。きりだんすをはこぶため、おかあさんがぎょうしゃさんにおねがいでいたそうだ。おにいさんは二かいにあるきりだんすのながさをはかり、きずがないかしらべた。ひき出しをあげしめして、中にものがのこっていないか、ガタガタしていないかもしらべた。きりだんすのひき出しはよこにはそながくて、たくさんあった。たんだきものをに入れるのに、ぴったりのサイズなのだと、こくらのおばちゃんがおしえてくれた。それと、きりだんすにきものを入れたら虫くいのしんぱいがへること、カビが生えにくくなることも。

「きりのにおいを虫がいやがるとね。虫をよせつけんし、きりはこきゅうしとるけん、ジメジメしとつてもカビが

生えんのよ。」

空気をすったりはいたりするなんて、生きているみたいだ。ぼくは、うんぱんようのぬのでつつまれたきりだんすに、

「いってらっしゃい。またあとであおうね。」と、こえをかけた。

あつというまに、きりだんすをはこびおわった。おかあさんはこくらのおばちゃんに、ぼくの入学しきのしゃしんを見せて、まえにもらったきもののおれいをいっていた。しゃしんには、しんぴんのせいふくのぼく、かっこいいスーツのおとうさん、夕日みたいないろのきもののおかあさん。そのきものは、こくらのおばちゃんのお気に入りだったそうだ。おかあさんはいろいろなきものをもらった。てんじかいで、一かきただけのきものはしつこがちよつとよごれているけれど、まだまだきれいなきもの。

「たくさんありがと。おれいに、ベストをつくってきだから、きてみてね。」

おかあさんは、青いきものをぬいなおしてつくった「ベスト」をこくらのおばちゃんにあげた。このかたちなら、すぐにきることが出来る。きものはばしょをかえて、きる人をかえて、かたちをかえて、ずっとかつやくするなんてすごいな、とぼくはおもった。

こくらのおばちゃんにさよならをいって、ぼくはおとうさんおかあさんのおしごとについていたり、おんせんウイークをすごして、五月五日、日曜日、よる八じ五十ぶん、ぼくのおうちにとouchやく。ぼくは車の中でねていたから、じかんはあとでおとうさんにきいた。

五月六日、月曜日、九じ、こくらのきりだんすがぼくのおうちにとouchやく。こんどは、にもつはこびのおじさんがきりだんすをもってきてくれて、ぬのから出してチェックをはじめた。きずなし、ガタつきなし。こくらのおひっこし、大せいこう。

「いらっしやい、ながたびおつかれさま。」

ぼくはきりだんすに、こえをかけた。たいせつなものを

ゆずってもらって、それをだいじにつかうって、なんだかすてきた。こくらのきりだんすは、きょうもぼくのおうちで、きものをまもってくれている。



中学生の部

大賞

雲散鳥没

Jakob-Fugger-Gymnasium 三年

チャケ レオン

グンター・チャケ。一九四四年十二月二十四日生まれ。現在ドイツのアウグスブルグ市で年金生活をしている。ドイツのドレスデン出身だが、故郷は同じ旧東ドイツのツピツカウ。元々は資産家一族だったがドイツの敗戦とドレスデン大空襲が原因で苦難の人生を送る事となった。両親と兄、姉がいたが現在姉以外は他界している。モニカ・チャケ。一九四五年二月十三日生まれ。グン

ターの妻で同じくアウグスブルグ市で暮らしている。第二次世界大戦当時、両親はポーランド（当時はドイツ領だった地域）で暮らしていたが、終戦間際にドイツ系住民に対する迫害を受けドレスデンに避難してきた所謂ドイツ人難民。両親と妹がいるが両親は他界している。

二人は私の自慢の大切な祖父母だ。

私から見ると二人の共通点は非常に穏やかで皆に優しいが、揺るがない信念と自分の人生に対する誇りを持っている。

そして何より二人はいつも一緒だ。

ドレスデンの中心市街の素晴らしい眺めを見下ろせる小高い場所にあった集合住宅で長年暮らしてきた。

路面電車で市街地に行きエルベ川沿いを散歩しオペラハウス・ゼンパーを横目にフラウエン教会へと向かう。

その途中に広場がある。広い場所にもかかわらずベンチが一つだけポツンと置かれている。そのベンチに腰掛けてしばらく時を過ごすのが二人の日課だった。

私が生まれたのを機に愛してやまないドレスデンを離れる決意をし、私達家族が暮らすアウグスブルグに来てくれた。現在同じマンシヨンの敷地の向かいの棟に住んでいる。

そのため私は幼い頃から祖父母とたくさん時間を過ごしてきた。

いろんな所に出掛けるのはもちろん、絵本を読んだりミニカーを走らせたりボードゲーム、カードゲームなどでいっぱい遊んでもらった。

ギムナジウムに通う今現在も金曜日の昼過ぎには祖父母宅を訪れ、三人で時間を過ごし夕食を一緒に食べる。また週末には家族皆でティータイムとカードゲームや双六ゲームを楽しむ時間を持つ。

この双六ゲームは少し色褪せている。優しく扱わないと破れてしまいそうな感じがあり台の裏には父の名前が書かれている。

今になって気づいた事だが、祖父母の家ですっと私が使っていた物は全て父が幼少期に遊んでいた物だった。

つまりそれは五十年以上も昔の物という事になる。しかもそれらは全て当時の箱のまま見事なまでに綺麗きれいに保管され続けられてきた。

少し前に東ドイツというタイトルの本を買って読んだ。典型的な旧東ドイツの家具を使ったカフェがあったタイムスリップした気分になれると評判でカラー写真付きで紹介されていたのだが、それはまさしく私がいつも過ごしている祖父母の家のリビングそのものだった。祖父母の結婚当時に一大決心をして買った思い出の高額な家具で、納品されるまで三年も待った。

祖父母の家でカフェをする時にティーカップとケーキ用のお皿を戸棚から取り出し並べるのが私の役割だ。取っ手を摘んでそっと扉を開けるとゆっくりキーツと軋きむ音がするのが何とも心地良し、ガラスのモザイクが綺麗で少し燦きらんでいる。

他の人達からすれば昔を懐かしむ為の一時的なおしゃれアイテムかもしれないが、祖父母にとっては至って普通の日常の一部だ。特別な事は何もない。ずっと変わら

ない。

地下の倉庫はもつとすごい。初めての散髪で切った髪や乳歯や臍へその緒、気に入って使ってきた物など父のほぼ全ての過去がが綺麗に整頓され保存されている。

ドレスデンからアウグスブルグに引越す際にある程度倉庫にある物を処分せざるをえなかったが、父の物だけは全て持ってきた。二人にとっては捨て難い宝物ということだ。

日本人である母が海外に出たいと思い立った時にドイツを選んだのは学生時代にドイツ語を専攻していたという事もあるけれど、ナチス時代と東ドイツ時代の歴史に興味があったからで、他の人よりはある程度時代背景への知識と理解はあった。

そんな母でも父と結婚の報告に初めてドレスデンの祖母の家を訪れた際これまでにない大きな衝撃を受ける事となった。それはドイツと日本の文化の違いというものなどでもなかった。

朝起きると先ず「おはよう」と挨拶をするけれども必

ずハグとキスをする。息子を溺愛でんあいしているからではない。

一寸先は闇ではないが、今日という日を大切に楽しく一杯過ごそうという気持ちが進められている。

朝食は皆で準備し、食事にはゆっくり時間をかける。そして今日は何をする予定なのかと、最近の様子などを語り合う。そこには穏やかな時間がある。「さっさと起きなさい！遅刻する！」と普段私が母から言われ急かされる時間との乖離かいりがはなはだしい。

日中はお互いにする事をする。特に予定がない場合は一緒に散歩に出かけたりスーパーに買い物に行ったりした。そして夕食もまた朝と同じように時を過ごす。

食事は至って普通のメニューで特別なものはないし、レストランに行くわけでもない。

夕食後のリビングはオレンジがかった温かみのある色になるよう照明を落とす。少し飲酒をしながらみんなでロメー（ラミー）というカードゲームをする。合間に世間話をしたりして楽しい一時を持つ。

そのような祖父母と共に過ごす一週間の生活のなか母

は気付く。

二人は朝の挨拶をする時からきちっとした身だしなみであり、自分に用意された食事の前に他の花とは別に特別に一輪の花を置いてくれている。そして一緒に食器を出し入れする中でわかった事は普段は使わない特別な食器を使ってくれていたのだと。

礼儀、愛情とはどういうものなのか。お金はどのように使うものなのか。素敵な時間の過ごし方とはどういうものなのか。

家族を思いやる行動を取った事などあったのか。共に楽しく過ごす時間なんてどれほど持っただろう。高級マンションに暮らし、ブランド品を身に着け、外車に乗り、頻繁の海外旅行やエステ美容院、高級レストランなど身分不相応にも関わらず自分の欲望を満たすためにお金を湯水のように使ってきた。幸福感や素敵な時間の過ごし方をはき違えたまま暮らす中で持っていた価値観が全くもって無意味であり、恥ずかしいとすら感じた。

祖父母とドレスデンで過ごした一週間が家族に対する

考え方や人生観を見つめ直すきっかけになったと母は言う。

貧乏臭いとかケチという言葉があるが、祖父母の生活は確かに質素ではあるがそれには当たらない。自分たちが生まれた時から変えられない与えられた環境の中、質素な生活を過ごす過程で持ち得た揺るがない人生観と価値観がある。

この祖父母が持つ人生観や価値観はどのようにして生まれたのか。

それにはドイツの国家としての歴史が大きく移り変わる中で二人の家族の人生がはぶろ翻弄されてしまった事が深く関わっている。

私がギムナジウムに通い始めた頃の事。クラスの課題で、東ドイツというテーマを父の出身地だからと安易に取り上げた事がきっかけだったが、そこからそれまで知らなかった祖父の苦難の人生を知る事となった。

それからは何か事あるごとに当時はまだ話してくれていなかった事や、政治や世の中に対する不信感や苛立ち

なども話してくれるようになった。チャケ家は何時どこからやってきたのか、どういった家系だったのか。また祖母の家系、人生を深く知るきっかけにも繋がった。私の祖父母は第二次世界大戦後から東西ドイツが再び統一されるまで激動の時代の中を生き抜いてきた。

【祖母の生い立ち】

祖母の父はツイーマンといって大工のような仕事を代々していた家系だった。

高祖父とは少しだけ一緒にいたという記憶があるそうだが、何故か八人もいた曾祖父の兄弟とは全くコンタクトはなかった。

曾祖母には一人姉がいたが、姉以外身内はみな亡くなっていた。

曾祖父はナチスのソ連侵攻にあたり送り込まれた三百万人を超える兵士のうちの一人だったが、任務中に部隊が攻撃を受けた。

爆破された大きな金属の破片が左足に深く突き刺さり

重傷を負った。これがきっかけで彼は任務を解かれ、病院での治療と家族のもとで療養ができる許可をもらい帰路の途中にいた。

曾祖母は姉と一緒に暮らし戦場に出た夫の帰りを待っていたが、ドイツの敗北が迫るにつれドイツ人に対する強奪や強姦ごうかん、殺人への恐怖が現実のものとなってしまった。曾祖父との連絡の手段がなくなるため家を離れるわけにはいかなかった。しかし命の危険が迫っているという現実から暮らしてきた家を手放す以外に選択肢がなかった。曾祖父と会えなくなるかもしれないという覚悟で持てる物だけを鞆かぶとに詰め込み祖母を身ごもった身体で逃げるようにドレスデンに向かった。

祖母はそもそもこの世に誕生した事自体が奇跡だった。一九四五年二月十三日の夜ドレスデンは上空襲に見舞われる。この日の夜に二人が乗った列車はドレスデン中央駅に到着する予定だったのだ。

ところが途中で陣痛が始まり耐えられなくなった曾祖母は姉と共に途中下車する事を余儀なくされ病院に向か

った。

そのおかげで祖母は無事にこの世に生まれる事ができたが、乗っていた列車は破壊されドレスデン中央駅の建物も爆撃を受け多大な犠牲者が出た。

しばらくして曾祖母は乳母車を手に入れ祖母と姉とドレスデンに向かうが、ここでもまた奇跡が起こった。中央駅に到着しプラットホームから出口に向かう途中で曾祖父と偶然にも再会する事ができたのだ。

しかし彼は衛生環境の悪い中で長い移動時間のせいで傷口が再び開き感染症を起こし始めていたため歩行することが困難な状況にあった。そこで曾祖母は祖母が寝ている乳母車の上に板を挟み、その上に彼を座らせ移動しようと試みた。

ちょうどそのタイミングでロシアの医療部隊が到着した。緊張感が走る。俯き加減で部隊が通り過ぎるのを待っていたが、曾祖母は一人のロシア兵医師から声をかけられた。

言葉は理解できないがどうも曾祖父に乳母車から降り

ろと言っているようだった。曾祖母は恐る恐る板をはずした。中を確認し祖母を見つけたロシア人医師の顔色を窺う。

恐怖を感じていた曾祖母の予想に反し医師は死にかけている祖母を見て驚いた様子で家族を部隊が向かう病院に同行させた。彼の適切な治療のおかげで祖母は命拾いした。曾祖父は診察したドイツ人医師から足を切断すると宣告された。そこに偶然またあのロシア人医師が現れドイツ人医師を叱責し適切な処置を指示してくれた。おかげで彼は一生足を引きずるように歩かざるを得なかったが足を切断せずに済んだ。

退院し、家族皆で再びドレスデンに向かう事になった。車内で偶然居合わせ世間話をした男性が裕福な人だったらしく、事情を理解した彼が自分の持っている建物の屋根裏部屋を生活の目途が付くまで貸してくれると言ってくれた。(一緒に過ごしていた姉は一人で東ドイツの壁ができる前の混乱期にドイツ西側に渡った。その後一度手紙をくれたがそれ以降は連絡も途絶えてしまった)

しばらくして幸運にも曾祖父は大工としての仕事、曾祖母は郵便局での仕事に就くことができた事で落ち着いて生活できる目途がようやく立った。部屋を貸してくれた男性にきちんとお礼をし、家族はドレスデン郊外の田舎の一軒家で新しい生活をスタートした。

そこは本当に田舎だったそうで牛や鶏などの家畜動物と自然と教会しかないような場所だったと祖母は当時を振り返る。

田舎での暮らしは曾祖母の希望だったらしい。祖母はウサギや鶏を育て、命をいただくという事や森や川の自然からたくさん知識を学び育った。十三歳になる頃に母親の妊娠がきっかけで再びドレスデン市内に引っ越す事となった。妹ができた。妹の世話をしながら学校に通い、卒業後は機械工場の事務職員として働いた。

【祖父の生い立ち】

ZSCHACKE (チャケ) という苗字はドイツでは非常に珍しい名で「チャ」の部分ドイツ語では馴染みが

薄い発音になる。私もつい先日初めて行った図書館で會員証を作る際、名前を二度聞かれた挙句出来上がった會員証の名前のスペルが間違っていた事に対して訂正せず「ああまたか。でもまあいいか」と諦めた経験をしたばかりだった。

しかしチャケという苗字を持つ人は現在のチェコにはたくさんいてその上スペルも全く同じである。日本語にも「ちゃけ・茶家」という言葉があつて茶道を教える事を業とする人の事を言うらしい。とても興味深い。

資本家だった事を考えるとおそらく産業革命の際、資本の更なる拡大のためにドイツへ渡り他の資本家との繋がりを利用し大成功を収めたのだろう。

チャケ家の資本家としての歩みは歴史の授業で教わった軽工業から不動産業へ拡大していったという過程とも一致し説明が付く。

高祖父は第一次世界大戦時チュニジアにいた。アラビア語に堪能だったようで指揮官の下、記録係として同行していた。

アラビア語で書かれた部隊でのやり取りの記録や日記、個人的なものと思われる手紙と彼の写真、滞在場所であろう写真とチュニジア人男性の写真が一緒に公文書館に保管されていた。連絡を取りコピーを手に入れる事はできたが残念な事にドイツ語翻訳された資料は無かった。そこで翻訳機能を試してみたところ幸いにも概ね理解する事は可能だった。

当時、チュニジアで有名だった歌手の写真だった。手紙はおそらく彼に宛てたものだろう。命の危険がある状況に置かれている彼と彼の息子のことがドイツにいる自分の息子達への思いと重なり、彼らの無事と幸せを神に祈りますという別れの挨拶の手紙だった。

彼の教養の高さが窺^{うかが}えらるとても奇麗な書体に見入ってしまった。また心優しい方だったのだと嬉しくも誇らしくも感じる。

祖父は本来なら上流階級と言われる家系の出身だった。一族で十棟以上の建物を所有していたし、南アメリカでは複数の軽機械工業の経営にも携わっていた。曾祖

父はその内三棟の建物と靴下工場の権利を持ち管理を任されていた。

祖父の誕生日は一九四四年のクリスマス。曾祖父はドイツの敗戦が迫る中で生まれてくる祖父の事を苦々しく感じていた。

一九四五年二月十三日。ドレスデン上空襲の日だ。そしてこの日が祖父のその先の人生を決めたと言っている。

またこの日はファッシングのお祭りをしていたという事もあり子供達は綺麗に着飾り夜遅くまで外にいた。

祖父には年の離れた兄と姉がいた。二人は母とファッシングに出掛けたために祖父はベビーシッターに預けられていた。

空襲の警報が鳴り市民が避難する中、何故かベビーシッターは他の子供を連れ祖父だけを残り部屋を後にした。連れて逃げるにはリスクが高いと判断したのか、忘れただけなのか答えを聞くことはできなかった。彼女たちが避難するために乗ったバスが爆弾で破壊されたから

だ。結果祖父だけが助かった。

当時ドレスデンは戦争難民をたくさん受け入れていたためエルベ川沿いにたくさんさんの難民キャンプがあった。空襲から避難してきたエルベ川沿いを歩く人々に向かつて連合軍は酔っ払い、上機嫌で叫びながら銃を乱射し続けたという。そしてここでもたくさんさんの市民や難民が犠牲になった。

その狂気のなか赤子をベビーカーに寝かせ持ち手に幼い長女を座らせ、長男の手を握りエルベ川沿いを曾祖母はひたすら歩いて逃げた。祖父の家族が全員生き残ることが出来たのは幸運だったとしか言いようがない。

奇跡的に住んでいた自宅も被害を受けずに済んだが、ツビツカウに所有していた建物全てが崩壊してしまっ

た。
一九四五年五月七日、ナチスドイツはフランスで無条件降伏し敗戦する。

この後祖父の人生は大きく変わる事となってしまふ。

戦後、女性は連合軍やロシア軍によるレイプに怯えな

がら暮らす事となる。自分や子供を守るために多くの女性が涙を飲んだ。待ち望んだ夫や恋人が戦地から戻ってきててもこの事が原因で関係が崩壊してしまふ。何もかもがカオスな生活が始まる中、所有していた建物の瓦礫撤去の命令が出た。当時の一般市民にそんな事ができるはずも無く、土地を没収され靴下工場も全て取り上げられた。

結果チャケ家は全財産を失う事となり、曾祖父は仕事をせず気が向いた時にだけ教会の鐘を鳴らすだけとなった。代わって曾祖母が一家を支える事となる。

それからの祖父の生活は酷いものだった。限られた食事は家長である曾祖父が食べ終わるまで待つ。残りを兄と姉、母とで分け合うのだが力関係で祖父の取り分は少なくなるためいつも空腹だった。また、連合軍が子供に配ってくれた貴重なチョコレートも分けてもらえるはずもなかった。

祖父は母がドレスデンを訪れた時、旅行ガイドブックに載っている有名なモザイクのある乳製品屋に行きたい

と言って案内した事がある。なんとそこは祖父が小さい頃からお使いで毎日のように重い牛乳とチーズを買いに行っていた場所だったそうだ。

一年で唯一の楽しみイベントはクリスマスだった。この時だけはモミの木を買って家に飾りプレゼントも用意してくれた。

（しかし祖父だけはクリスマスのプレゼントと誕生日プレゼントを一緒にされ、一つしか貰えなかった。）

ツリーには何本もの大きなロウソクを付ける。そして最後の火が消えるまで静かに過ごすという事がチャケ家のクリスマスだった。この決まりを破ればプレゼントは貰えない。このエピソードからだけでも如何に厳しい父親だったかがわかる。

五歳の時だった。建設現場の足場をのぼり遊ぶ兄たちと一緒にだったが祖父は足を滑らせ転落した。霊安室で五日間も生死を彷徨う事態となったが、医者が見放したにもかかわらず祖父はまたここでも命拾いする。

しかし、この事故が原因で長い時間何かに集中しよう

とすると激しい頭痛が起こるようになった事で祖父の将来の進路の選択は限られたものとなった。

そのため祖父はとても優秀だった兄と姉とは違い曾祖父から一層きつく家事手伝いを言い付けられ言葉の暴力を受けて育つ事となったがその後は家具職人として働き始めることになる。

祖母は戦後、裕福ではないながらも両親から豊かな自然の中で愛情いっぱい育てられてきたので当時としては一般的な家庭で育った子供時代と言える。

しかし祖父は違う。曾祖父は敗戦後からベルリンの壁ができるまでの混乱期に資本家の仲間達に西側に来るように誘われ、協力してくれるとまで言ってもらっていた。それなのに彼は折角の申し出を拒否した。ドレスデンを離れたくない。それだけが理由だった。

東ドイツ政権が始まる頃にも曾祖父は「自分はキャピタリストだ。コミュニストにはなりたくない。」と自ら身分の階級を下げた。

このように彼は人生を挽回できるはずだったチャンス

を二度も棒に振っている。しかも二度とも子供の将来を
考えもせず、自分のプライドを優先してしまっている。

そのため兄はベルリンの大学で三つの学位を取得し、
西側での一級建築士として華々しいキャリアをスタート
するはずだった計画が潰されてしまった。西側に行つて
いたなら金銭的な苦労はずっと軽減されていたという事
は確かだ。祖父たちはずっと曾祖父の決断に不満を持ち
ながら生きてきた。

【祖母の出会いと二人の東ドイツ時代】

祖母は元々知り合いではなかったが同級生だ。偶然
にも趣味が同じダンスで、時々教室で顔を合わせる間に
グループができた。

祖母はスラッと背が高くブロンドで青い瞳の祖父に一
目惚れした。この時代はまだブロンド・ブルーアイとい
う事がステータスだった。祖母と同じように何人かの女
性は祖父を気に入っていたようで、控えめな性格の祖母
には祖父と話せる機会がなかなかなかったそうだ。それ

に黒髪だった祖母にとって祖父は高嶺の花だった。だが
祖父は祖母を選んだ。それは祖母が祖父の母と同じよう
に控えめでよく笑う人だったからだそうだ。もしかした
ら自分の運命を決めたと言ってもいい二月十三日が祖母
の誕生日であるという事も関係しているのかもしれない。
い。

お互い二十三歳の時に結婚することを決めた。祖母は
緊張しながらも幸せ気分一杯に祖父の家を訪れた。

しかしその気持ちは一瞬で碎かれる。曾祖父、兄、姉
は祖母に「お嬢さん本気ですか？外見だけで決めたので
すね。彼はただの職人ですよ。もう一度言いますよ、た
だの職人。この先二人で一体どうやって生きていくので
す？浅はかな考えは持つべきではない。」と言い放った。
大学を卒業していない祖母を見下した発言だ
った。

祖母は怒りを押し殺し「私は彼が大好きだから結婚す
るのであり、心配はご無用です。二人で力を合わせてや
っていきます。」とはっきり言い返した。

そうは言っても実際の生活はそんなに簡単にはいかない。二人は家族を持つ計画を綿密に立て協力しあって生活をした。目的が立ったのは四年後と時間はかかったがその年に父を授かる。

二人に宝物ができた。

しばらくして祖父のもとに両親から電話が掛かってくる。「人生を終わりにする。二人で決めた事だ」と彼は告げた。いくら反対しても自分の人生は自分で決めると言い張り今までと同じように決意が変わる事などない。

祖父は直ぐに電話を切り二人の家に向かったが遅かった。玄関付近まで来た時に既に外までガスの匂いが漏れてきていて危険な状況だった。そのため祖父はドアを開けることができないままただ救助されるまで待つしか術がなかった。

結果二人は望み通り旅立った。

もともと家族としての交流はほぼなかったが、この出来事が決定的となり兄と姉からなぜ救えなかったと罵られ、縁を切ると言われた。祖父の家族は祖母と父だけと

なった。

父は非常におとなしい性格だった。祖父母は父が小学校に通い出した頃から彼の成績が非常に良い事に気がついていた。

東ドイツ政権下では高級品や外国製の物などは一般人にはほぼ回ってこないが、生活必需品は豊富ではないものの安価で買うことは出来たし子供の教育や施設などには比較的良好な環境が整えられていた。

学校で優秀な成績を収める父にもその機会は与えられた。学校で代表に選ばれ、数学オリンピッククドレスデン大会に参加し、一番の成績を取った。

しかしその先の大会に進むのは父ではなく選ばれたのはSED(社会主義統一党)の子息だった。この経験から祖父は父がいくら優秀だとしても将来社会でトップエリートになるチャンスはないだろうし広い世界を見る事もないと悟った。

しかしスポーツならどうだろう？ 個人競技なら特に不正が難しく白黒はつきり付くし海外を知るチャンスが

大いにある。またおとなしい息子が自分を守る手段にもなる。〃〃という考えから父に柔道を始めさせた。

祖父母は柔道の活動以外に父が興味を持つものに対しても全力で応援してきた。例えば父はコンピューターに夢中になった。祖父が買い与えた訳ではない。高額すぎる事はもちろんそもそも買う機会が与えられていない。隣人が西側にいる家族からプレゼントされた物で得意げに見せたものだった。

祖父はそれでも父の将来に繋がるならと隣人に息子にも使わせて欲しい。その代わり家の修繕や家具の組み立てや電気配線などなんでもすると交渉したおかげで父もコンピューターの知識を得る事ができた。

柔道においても父は祖父の期待通り実力を上げていき大会で表彰台に毎度登るまでになり、スポーツ強化育成専門の学校に入学できる推薦をもらった。

その学校はドレスデンから二時間ほど離れた場所にあったため父は家を出て寮生活をする事になった。週末になると祖母の美味しいご飯を食べるためにドレスデン

に一時帰宅していた。それには理由があった。寮の中でも階級差があったのだ。部屋の充実度、食事の種類、珍しい海外のお菓子の配布やゲーム機所持など、SEDなどの関係者の息子たちには特権が与えられていた。子供の世界にも大人と同じ社会の縮図があったわけだ。

試合がある時は必ず祖父母は駆けつけ父の奮闘を見守った。これらの費用を工面するため祖父は懸命に働いたがそれだけでは足りない。そのため祖父は西側へ納める文房具品を運ぶ長距離トラックの運転手としても働いたし、同僚、近所の人たちの家具修理などの仕事など出来る事は何でもした。

そんなある日、祖父は同僚の知り合いが改造されたバスを使って西側に脱出するので一緒に来ないかと誘われた。

祖父は考えるまでもなく断った。祖母と父の命を懸けるにはリスクが大きすぎるしその人を信頼できるはずもないからだ。祖父母はこれまでと同じ生活を送った。

【ベルリンの壁崩壊からドイツ統一後】

一九八九年十一月九日ベルリンの壁はついに崩壊する。

祖父は父が柔道を辞めてギムナジウムに編入したいと言った当初は反対の立場を取っていた。ベルリンの壁崩壊間際の頃には既に、これから自分の能力次第で生活は豊かになる時代が来る。そのチャンスは大学に行き自分で掴むと父は心に決めていた。

オリンピックに出るチャンスがあったかもしれないのにと、思うと苦渋の選択だったかもしれない。しかし祖父母は父の考えを尊重し応援することを決め受け入れた。

今までスポーツ専門の学校にいたため勉強は実際かなり遅れていた。祖父母はそのため大学では勉強だけに集中できる環境を父に与えたかった。人の何倍も勉強し結果を出す父を誇らしく思いながらサポートし続けた。

結果、父はディプロムエンジニアという学位を取りシステムエンジニアとしてドレスデンで職を得た。父はやっと自分が祖父母の生活を十分助ける事ができるだけの

給料を貰う事ができた。父はこれからは自分が両親に恩返しする番だと仕事に打ち込んだ。

何年か過ぎた頃アウグスブルグにある大手産業ロボット会社の下請けを担当した。その仕事ができかけで直々に部長からアウグスブルグに来ないかと父にとってはこの上ないオファーがあった。

父は迷った。生活は更に良くなるが祖父母の事が頭にあつたからだ。しかし祖父母は父の背中を押した。一緒にこうとうと言う父の申し出も断った。

こうしてまた父と離れて暮らすようになり二人だけの生活となった。

【父の新しい家族から現在に至るまで】

父のアウグスブルグでの新生活がスタートした。変わらず父は両親に仕送りを続け自身も慎ましい生活をした。長期休暇の際はたくさんのお土産を持って必ずドレスデンに戻るようにした。母と結婚してからは二人でドレスデンを訪れるようになった。

そして私が生まれる。母は私を帝王切開で出産した。入院中は日本から母方の祖父母が母をサポートするために来てくれていた。日本に帰らなければならぬ二人に代わって今度は祖父母が母のサポートをするためにアウグスブルグに来てくれた。

私は十二月十一日に生まれたのだが、初めてのクリスマスは母方、父方両方の祖父母に囲まれて最高の時を過ごした。このクリスマス休暇を過ごす時間のなかで、色々な思いを抱えながらもずっと生きてきたドレスデンを離れて私たちが暮らすアウグスブルグに来る事を決意してくれた。おかげで私は生まれた時からずっと祖父母と一緒に時間を過ごしてきた。

私が最近よく考えるのは
生と死、や、祖父母は自分が自分で幸せだと感じて
いるのか？、ということ。

私にももちろん成績の事とか将来の事とか悩みが無い訳でもないし、母に叱られて一人になりたい！とムカッとする事も多々あるが私は私である事が幸せだ。新たに

生まれ変わりたいとかミリオネアの有名人など他の誰かと代わりたいたとは全く思わない。

しかし祖父母は違うのかもしれない。

私や母など新しく増えた家族を通してやっと自分達の人生が幸せだと感じてくれるようになったのか？自信がない。特に祖父に対しては一層強く感じる。

二人は生まれた時から自分たちがいかに幸運だったのかを理解し感謝しながら生きてきている。

何故二人は日課の散歩で必ずベンチに座っていたのか。それはあのベンチがあった場所は第二次世界大戦時の犠牲者たちが集められ火葬（当時のドレスデンの壊滅的な状況では仕方なく一同に焼かれただけ）はあるが強制収容所での同じ行為とは意味が違う）された場所だからだ。ただ静かに座り犠牲者たちの冥福を祈る時間を持つためだ。

奇跡としか言いようがない幸運を持ち続けた者だけが戦争を生き延びる事ができた。

二人は生活を出来る限り切り詰め節約に努めてきてい

る。どんな物でも完全に壊れるまで捨てたりしない。家具や電化製品はもちろん衣服に関しても同じだ。今でも縫製し直し大切にしている。

父がアウグスブルグに引越しをした事で会える機会が減ったが、長距離の移動で負担にならないようにと新車のBMWをプレゼントしている。このための費用は父が働くようになってから祖母に渡していた生活費だった。父からの援助費用を使わず全て父のために貯蓄していた。

高級車は長時間運転しても疲れにくいし走りやすい。万が一事故を起こしたとしても重傷を負う確率は少ないだろう。熟慮し必要だと決めた物にはお金を使う。

父と母が結婚する時に残りの援助金を全て父に祝い金として返し、これからはもう自分の家族のために使いたいと申し出ている。

いかにも祖父母らしい。

祖母はドレスデン中央駅で助けてくれたロシア人医師をずっと探し続けた。結局見つける事はできなかったが

今でも感謝を忘れていない。

曾祖母がなくなった後、祖母は妹と一緒に両親が暮らしていたと思われる家を探すためポーランドを訪れた。しかし当時とは全く違う環境だったそうだ。この旅行を機に妹が疎遠になっていった。理由はわからない。

曾祖父が亡くなった時も唯一探すことができた産婦人科医をしていた叔父に連絡をしたところ二度と連絡をしないで欲しいと言われた。親戚家族はいないに等しい。

祖母の妹には娘が一人いて父よりも十三歳年が若い。名前はイネスという。父は何とか祖母のたに関係を絶たないよう彼女に定期的にハガキを送ってきた。その甲斐あって昨年イネスはアウグスブルグの我が家に遊びに来てくれた。最近男児を出産し、お祝いのプレゼントを母と一緒に買いに行き送ったところだ。祖母はこの現状で満足している。

祖父は一層複雑だ。資本家だった曾祖父が自ら破滅に向かうであろう人生を選び家族皆を巻き込んだ理由を理解できないでいる。

祖父母の家のリビングには祖母の両親の写真と祖父の母親の写真が飾られていてそばにはいつもきれいな花が置かれている。

そう、曾祖父の写真だけがない。西側に資本家の仲間たちと渡ってくれていたら・・・うそでもコミュニニストとして振舞ってくれていれば・・・生まれる前から自分の誕生は快く思われていなかったし、かわいがつてもらえた記憶なんてない。なぜ自分だけがいつも家事仕事を強制され冷たくあしらわれてきたのか。そもそも経済的なゆとりを持てていれば建設現場で遊ぶ事などなかっただろうから転落事故は起きなかったはずで、兄や姉と同じく大学に進学していたかもしれない。そうだとすればもっと家族の生活は良かったはずだ。挙句彼は愛する母を連れて人生を終わらせた。ドアの前で何もできずに救助を待つ事しかできなかった時間はどれほど苦しかっただろう。祖父は今でも曾祖父を許すことができないでいるのではないか。いや、恨んでいるのかも知れない。

祖父にはいまだに心に引っ掛かっている事がある。曾

祖父は戦地に赴いていない。これは何を意味するのか。ひよっとすればナチス党员であった可能性もある。党员として軍のために靴下を製造していたので免除されていたとしたら？そして戦後ナチ党员であったことが知れたのが全財産を失う事に繋がった本当の原因だったのか？という事だ。曾祖父だけが真実を知る。

例えそうだったとしても戦後にナチス党员だったドイツの大企業の多くはその事実を隠し続け今もなお大成功を収めている。祖父は何故自分達だけが全てを失うに至ったのかについて真実を知りたいと思いつけている。

グンター・チャケとしての運命を受け入れ家族を背負い生きていく。祖父が祖母と協力し何でもしてきたのは父の人生を少しでも光あるものにするためだけだったと言っても過言ではない。

父が努力した事ももちろんだが、そのおかげで父は子供の頃からコンピューターに興味や知識に触れる機会を持つことができた。そして念願だったエンジニアとして大企業に就職し十分な収入を得る事ができた。どれだけ

父を誇りに思い、幸福感で一杯だった事だろう。祖父母は長い間たくさん苦勞はしたが人生の大事を成し遂げた。

東ドイツ政権が崩壊したのち祖父は一人公文書館を訪れている。そこでは自分に対する密告の報告書を閲覧することができた。所謂いわゆるシクタージ文書だ。

ある程度は予想していたそうだがそれをはるかに上回る報告書があったそうだ。

同僚、隣人、知人親戚など周りのほとんどの人によって監視されていた。あの時の同僚たちの西側に行こうと誘いは、おとりだったわけだ。祖父母にはドレスデンに一夫婦だけ友人がいる。結局東ドイツ時代の交友関係の中で本当の友人と言えたのはこの夫婦だけだった。この夫婦とは今も交流している。

父に至っては友人がいない。作るつもりもない。両親の結婚式の写真には母の友人しか写っていない。家族だけでいい、家族以外は信頼できないという考えを今でも

捨てる事ができないでいる。(母はこの父の交友関係を持たない考えを理解しているし、父は母の友人との交流だけは拒絶していない。)

私にも少なからずその影響は及んでいる。ドイツでは例えば三時間ほどスポーツ施設を貸し切りにする事やケーキ屋さんでケーキ作り体験など友人やクラスの子を招いて盛大に誕生日会をする人が多い。私も色々な楽しい誕生日会に招かれた。しかし私には招待する立場の経験はない。どうすればいいのか方法もわからないという事もあると思うが、まず父はそのような感覚を持っていない。しかし私自身も誕生日会をしたと言った事は無い。理由はわからない。ただ、父と同じ感覚を気づかぬ間に刷り込まれていたのかも知れない。一人で何かをする事が好きという事もあるし、私はずっと大人しかいない環境に囲まれて育ってきた。真の友人とは何だ？自分が欲しいと思っているのかもよくわからない。これが良い事なのか悪い事なのかわからないが、チャケ家は家族と一緒に笑顔で健康で穏やかに暮らせること以上の

幸せはないし過度な交友関係、優越感や満足感が必要な
いと考えている。

ドイツでは一般的によくある事だが、我が家でも政治
的な話題は頻繁にあがる。

ただ、祖父母と父の考えは全く違う。メルケルが取っ
た経済優先政策の恩恵を受け収入的にもステータスにも
十分満足している父と祖父が同じ政治思考になるはずも
ない。

年金や生活保護制度に対してもそうだ。祖父には何故
若く働ける身体なのに安易に生活保護を受けるのが理
解できない。

街に出れば必ず路面に座り寄付を募る人々がいる。身
体が不自由な方、外国人などに混ざり最近はドイツ人高
齢者が増えているそうだ。なぜ気付くのかというと、祖
父母はそういった人たちに毎回食事や少しだが現金を渡
し世間話をするからだ。難民達の保護に反対はしないが
長年真面目に働き税金を納めてきた年金受給者達を置き

去りにし、難民や外国人を含む生活保護受給者のほうが
暮らしの水準が高い事実が我慢ならない。

ドレスデンで暮らす友人の老夫婦も先日ご主人が癌
になり介護が必要となった。施設に入居するためには
八〇〇〇ユーロ以上の現金を持っていないと入れない。そ
の理由から直ぐに答えが出せず老々介護状態に陥ってし
まっている。他人事では済まされない身近に迫った深刻
な問題だ。

またドイツに暮らす一部のトルコ人はこっそり二重労
働をし、決められた納税をせず貯蓄をして高級車を買っ
たり金を所持していたりする。一日話し始めると祖父の
怒りは収まらない。父はいつも祖父の話をただうんうん
と聞いている。

現在日本でもニュースになっているドイツでの極右政
党「どいつのための選択肢」の躍進も祖父母と同じよう
に苦々しい思いをして暮らしている多くの高齢者が後押
しをしまっている。

東ドイツでは社会的に絶望の日々を過ごし東西統一に

希望を持つも、いくら生活が厳しい少ない年金でも行政は助けてくれないし相談したところでアドバイスすらない。結局またドイツという国に見放された世代なのだ絶望している。

先日祖父は私にも生まれ変われるなら渡り鳥になりたいと言った。誰に縛られる事もなく色々な国にも自由に飛んでいく事ができるからだそうだ。そう言って笑った。

私にはこの願いが彼の人生を表して取り戻し様なない人生のピースが祖父にはあるのだと心がぎゅっと締め付けられた。

私はいま恐怖を感じている。ドイツの徴兵制度は現在停止中であって廃止はされていない。最近はこの徴兵制度を復活させるべきだという議論がなされている。今日までは平和だったので必要なかつたけれど、これからはわからないよねという事だ。

現在また戦争に向かって世界が流れ始めている。これから生きる私を含め誰しもが祖父と同じように人生の

ピースを消失する可能性が大にある。

例えば今の私たちの世代は色々な問題を抱えている。交友関係は学校だけに留まらず、SNSの中でも永遠と止むことなく続く事による学力低下、ストレス、不眠、いじめ、非行、事件事故などが起こる。ただこのような事で生じた一見欠けたかに見えるピースは家族の愛だったり専門家のカウンセラーだったり医学で似たようなピースを再生する事も出来なくはない。苦難を抱えている人を軽視しているわけでは決してないが、これらは平和というオブラートに包まれた中で生まれた新たな問題だ。私は医者になりたい。そして難病に苦しむ人を助けたいと思っているしその先の予防科学医療の世界に挑戦したい。しかし戦争で敗戦し国家が吹き飛ぶともなれば私の目標はおろか医療界もその他全ての世界を破壊する。それでも生きている限り生活をしていくしかない。

祖父母は国家の破滅を二度も味わった。

祖母と父とたった三人、希望はなく制限だけがある社会の中でできる精一杯の事を探し続けるしか選択がない

人生だった。

小学校での課題がきっかけで祖父の重い人生を知ったあの時の私は、これからは違う。たくさん笑って一緒に幸せでいよう。と心から思っていたし、祖父母は今私と一緒に暮らせて幸せでいてくれるんだと自信すら持っていた。

しかし私がどんなに愛を伝えても、どれだけ一緒にいても祖父の欠けたピースを埋める事はできないのだと祖父の笑顔を見た時思い知った。私になす術すべなどない。必死に探せばタンスと壁の間に挟かまっている？なんていう事はないし、どう足掻あいても見つからない。長い人生の中で幾度かは欠けたピースの修復可能なチャンスがあったはずだ。しかしそのチャンスは打ち砕かれ、ゆっくり少しずつ完全に消失してしまっていた。

私は今ドイツで巻き起こる難民や移民によるテロや問題行動が許せずにいる。テロに対しては一部の過激組織の行動であることは間違いないがまた一方で一般の移民が私達ドイツ人の心情を理解しているとは思えない行動

をとっている事も事実だ。人種・宗教が違うという壁は果てしなく高い。キリストの愛を押し付けて自己満足に浸っているだけになってしまっているような気さえずる。他の宗教の事など知らうともせず故意ではなくとも同化させようとし、上手くいかなくなると排除しようとする。どれ程傲慢ごうまんなのか。その傲慢さがまた戦争に向かう一歩に繋がっている事に震える。

平和であるためには教養と理解、思いやりを持つ心が不可欠であると思う。一部の人だけではない。皆がそう思い合って生きていかなければ成り立たない。

誰しも自分や自分の大切な人の人生のピースが消失してしまう事を望まないでしょう？

私の祖父母は家族としての鼻眉目ひいきめではなく本当に誰にでも優しく正直で誠実だ。互いに理解し支え信頼している。両親も同じだ。これを愛というならば私もそんなふうに一生を共にする相手に巡り会いたい。

本来なら家族や多くの友人に囲まれ毎日笑顔で過ごせていただろう。いったい何がそれを奪ったのだ。私だっ

て自分の人生のピースを消失したくはないし祖父にもそうあって欲しくなかった。既に人生のピースを消失してしまった人の心はもう取り戻せないのかもしれない。でも欠けた人のピースは周りの人の支えなどで修復できる期待が十分持てる。

だからこそ祖父母と同じように戦後の苦難の中を生きてきた多くの人達が支えてきた今の平和を壊すような事態を招くわけにはいかない。悪意に塗れた嘘に騙されないう知識や教養、理解と思いやりの心を持てるようになるためにも私は今ギムナジウムで全力を尽くしたい。そしてこの事を一人でも多くの学生や子供達にも共有してもらいたいと強くつよく願っている。

チャケ家にとってチョコレートは特別なもので、クリスマスや誕生日などにプレゼントとは別にして必ず贈りあう。

連合軍が配ってくれたチョコを自分だけ分けてもらえなかった経験があるからか、祖父母のリビングの棚には

色々なチョコレートがぎっしり詰まっている。今は食べたい時に思う存分食べ楽しんでる。

私は今後も祖父母の人生を終えるその時まで週に一度三人で食事をし、週末にカフェのあとチョコレートを食べながらゲームをして楽しい時間を過ごす。いつものように。

曾祖父の写真だけが飾られていない。これが全てを物語るのに今までどうして気に留めなかったのだろう。何とも言葉にし難い悲しくも空しい感じがするようになった。ひよっとしたら祖母も祖父と同じように違う何かに生まれ変わりたいと願っているのだろうか？嫌だ、嫌すぎる。

自分にはなく、ほぼ家族のために出来る精一杯を成し遂げてきた人生だったのだから祖父には次の人生は渡り鳥になって自由に飛び回って欲しいと心から思っている。と同時に本当は来世も私がチャケ・レオンとして生まれた時にまた私の祖父母でいて欲しいとも願う私の心の奥底の気持ちを二人に対し口にする事はないだろう。

あのととき悲しく笑った祖父の顔が私の脳裏を掠める。
「雲散鳥没」。私はこの言葉が嫌いだ。



中学生の部

優秀賞

光に馳せる

日本女子大学附属中学校 三年

孫 莉佳

今から三十七年前、一人の男が日本に降り立った。日本という新天地の空気を吸い込み、将来に対する不安と溢れんばかりの期待を詰め込んだ赤いスーツケースを片手に、その男は踏切の前で、道を渡るのを待っていた。その日だっけいつもの普通の日曜日だった。電車の中では買物や行楽帰りのファミリーの笑顔が揺られていて、どこかの家では夕食の準備が始まっていた。踏切

のガードが上がリ、視界が開けると、そこにはこれから日本で住む一軒の今にも倒れそうなアパートが佇んでいた。マジックアワーの夕日がさす光を帯びてなぜか輝いているようにもみえた。男は将来、自分が世界の光学に貢献するに会社を立ち上げようだなんて夢にも思わなかった。「こんにちは」と「ありがとう」という二つの唯一知っている日本語を頭の中で繰り返しながら、これから待ち受けるどんな試練も乗り越えようと自分に誓った。踏切を渡った。まるでそれが新しい道へのスタートラインであるように。

光の見えない日々

その男は一九四八年に中国で生まれた。社会的地位が高く裕福な家庭で三番目の子供に生まれたものの、当時の中国国内の政治環境が天変地異し、五歳の時に父は家族と引き離され、家財全て奪われ、一家は途方に暮れていた。母の手一つで男を含む四人兄弟を育て、母親の苦

勞は想像に絶していた。食べることも家族にとつて精一杯だった。男の姉は師範学校を出て先生になり、幾分か手当てされる食糧を自分で食べずに、食べ盛りの弟たちのためにこっそり持ち帰り、栄養不足や空腹で自分自身は長年胃炎を患うほどであった。子どもたちは母親の苦勞を見て、幼い頃から家事を分担し、男は小学校三年生から内職を引き受けた。手袋を編みながら、本を横に置き読みふけていた。読書は現実から遠く離れた未知の世界に連れていってくれるので、月明かりの下「海底二万里」「レミゼラブル」などの名著とともに空想の中で旅をした。お腹が空いていても、精神的に満たされていた。好奇心旺盛で、手も器用だった物づくりが得意な彼は、忙しい勉強と内職の合間を縫って自分で鋳石ラジオなども作っていた。その後も真空管ラジオなど作り、母親に大好きな伝統芸能を聴かせ、喜んでもらえた。貧しいながらも忙しく充実している毎日を過ごしていた。

しかし、その幸せも長くは続かず、文化大革命の混乱の中、心の光でさえも奪われた。学ぶ機会がなくなった

のだ。ありとあらゆる本は燃やされ、彼の学校でも教師たちが反革命的だと生徒たちに侮辱されているところを何度も見かけたという。当時彼は高校二年生だった。色々なことに敏感で物事を吸収していく年を自由な思想が固く禁じられた世界の中で過ごしていても、それでも学び続けたいという探究心を持って、自分の学ぶ権利だけは奪わせまいと彼は本を読んだ。もちろん本は禁止されていた。本を読んでいるのを見つかれば、反政府的だと言われて、自分はもちろん家族や周りの人にも危険が及びかねない危険な行爲だった。家の台所の壁の中に本を隠してまで読んでいた時期もあったそうで、危険すぎる無謀さとそれでも学びたい！という熱意が垣間見えるような気がした。そんな勉強熱心な彼に、世界がガラリと変わる出来事が起こった。それも、悪い方向に。

一九六八年に上山下郷運動が始まり、男も対象にもれなく入っていた。上山下郷運動とは例年通りの大学入試や雇用が行われず、「若者たちは貧しい農民から再教育を受ける必要がある」として、都市に住む中高校生を中

心に農村に行つて働かなければならないという毛沢東の指示が実行されたのだ。それから10年の間一六〇〇万人をこえる若者が都市から農村に下放され続けた。都市部の若者は教育を受けており、識字率も低く教育の概念がなかった農村の人々との暮らしに馴染むのは骨の折れるようなことだった。それに加えて、毎日洪水のように終わりの見えない慣れない労働に、帰りたくても帰れない家、会いたくても会えない家族と離れての生活はどんなに過酷なものだったのだろうか。男は二十歳から二十八歳の八年間、強制労働の生活を強いられた。田植え、田植え、田植え、田植え。春と夏のあいだはその繰り返しだ。秋になれば稲を刈り、冬には少し仕事が落ち着いてくるも、農家にはもちろん暖炉などはなく、厳しい寒さで心まで凍ってしまったような冬を8回も過ごした。その話を聞いていると、どうやって彼が勉強を続けたのか気になった。「独学だよ。本を仕事の合間に読んだりして。」いつもの笑顔であたり前のことのように言われた。独学。想像してみた。毎日の労働が一式終わった後は、心も体

も共にぐったりして一刻も早く休みたいはずなのに、男は勉学に励んだのだ。「机が無い時は、扉の板を横にして机がわりにした時もあったなあ。」話を聞きながら、一つの諺が頭に浮かんだ。「蛍雪の功」。このことわざは、中国の晋の車胤しやいんが夏に蛍を集めてその光で本を読み、孫康そんは冬の窓べに雪を集めて、月明かりに白い雪が反射する光を使って勉学に励んだという故事がもととなってきた。まさに当時の男が車胤と孫康の二人を鏡のように表しているように思えた。いや、この男の生涯を通じての努力がこのことわざを凝縮してできているかのように思え、改めてどんな苦境に立っていても、できないと思つてしまうものを諦めずにやり通せる精神に感慨を受けた。勉強の他にも幼い頃から大好きな物作りの長所を生かして、貧しい落後の農村に革新的なことを行った。たとえば灌漑水道の合理化、化学肥料の有効使用など、その才能は役所の耳に入り、当時の革命宣言のための村宣伝用のスピーカーを作ったり、村に電気の導入を頼まれるようになる。

畑仕事、畑仕事、畑仕事、勉強、畑仕事、畑仕事、畑仕事、勉強、

ある晴れた春の朝。太陽が土に残った雪を優しく溶かしていく頃、男は二十八歳になっていた。激動の文化大革命も終わりに近づき、八年間の労働が突然終止符を打った。男は町に戻り、今度は工場に勤めて仕事を始めた。それから一年後、二十九歳の時にとつもないチャンスが舞い降りてきた！やっと中国の大学システムや受験が十一年ぶりに再開したのだ。男にとって、それ以上の嬉しいことはなく、まるでこの受験への合格の道が将来のすべての鍵を握っているような気がして、短期間で猛勉強し、悲願の大学に合格することができた。十一年遅れての大学の入学だった。大学では、勉強は以前も習慣だった独学、ものを作ることなど、今まで行ってきたことと似たような部分が多く、人によっては面白さに欠けていたかもしれないが、男は初めて学ぶことを認められた環境で色々な知識を吸収して、自分の力にしてきた。

一九八二年に大学を卒業し。そこからは計り知れない可能性に溢れていると感じ、技術関連の仕事を行った。そこで痛感したことが、中国の様々な分野での技術の遅れについてだ。文化大革命が国内では起きていたため、中国は鎖国状態だった。その閉ざされた空間から一気に視界が開けて、仕事を通して先進国の様子が見られた時、きつとその時の男の心情は、初めて西洋を訪れた時の岩倉具視のに似ていたのかもしれない。そのようなことも相まって、男の心には先進国で最先端の技術を学びたいという強い気持ちが芽生えた。そこでその技術先進国の中でも特に注目したのが、そう、日本だった。その時の日本はバブルの真っ只中であり、戦後のボロボロだった国が、なんとか立ち直るところか世界のトップに這い上がってきたのを見て世界中が注目していた時期である。まるで選ばれし者のようにチャンスは男のところに舞い込んできた。一九八七年、ついに日本への留学が決まったのだ。母国、中国を離れ、新天地日本へと旅立つ時が来たのだ。

「どんな気持ちだったの？日本に初めて来た時は」

「とにかく不安と期待が入り混じり、まるで自分が今世界に生まれ落ちたのかのように全てが新鮮に感じられたよ。辛いことがあっても、自分を信じて自分に負けずに頑張ろうと決心した。」

かすかな光を逃すな

最初の数ヶ月はまず日本語の習得に励んだ。よく日本語と中国語は似ていると言われるが、もう三十代の完成した脳に習得は不可能かと思えた。しかし男は朝も夜も勉強に励んだ。かつて農村でそうしていたように。その時の男には妻子もいた。もちろん留学なので単身で日本に来るしかできない。中国と日本を阻む三〇四五キロメートルは果てしなく感じた。スマートフォンなど便利でどこでもいつでも連絡を取れるものなど当時はまだなく、高額な国際電話も月に一回だけという孤独感も際立

つ最初の数ヶ月だった。一ヶ月四三八〇〇分の時間の中、たった五分ほどの家族の応援の声を糧に一刻も早く目標である日本の大学に入学するために日々精進した。電車の線路の真横に立っている今でも崩れそうなポロアパートで勉強の合間に印鑑を彫っていた。男は幼少期から書を嗜み、その才能はある日本人の書道家の目に留まり、展示会への出展をきっかけに、印鑑彫りの依頼がよくあった。生活費の足しにすることができたのが何よりも救いだった。今でも印鑑彫りは男の趣味で、私にもたまたに教えてくれる。彫刻刀で冷たい滑らかな石に、白い粉を出しながら走る手捌きは、小さな頃から私の好奇心をくすぐり、教えてもらって試行錯誤しながら初めて彫れた私の名前の入った印鑑は今でも私の宝物だ。

半年の日本語の勉強と中国がむしやりに学ぶ喜びと共に吸い上げた知識を自信に変え、男は埼玉大学大学院の電気工学科にはれて入学。そこで真空、薄膜関連の修士課程を専攻した。世界はまだ八十年代だったため、母

国語や生まれも育ちも中国の人間が日本の大学院に自力で勉強して入るなど前代未聞だった。「勉強している中で感じたのは、中国の大学での数学や物理などの基礎教育は日本と比べて遅れていないけど、応用や技術進展の環境の面での遅れがかなりあるということ。」

「中国の全てが遅れているわけじゃなくて、まだまだ躍進することができる。母国と日本の差にショックを受けるのではなく、まだこれから伸び代がたくさんあるのだなとポジティブに捉えられた。」男はそう話している。そんな埼玉大学大学院での生活は確実に男を成長させた。最初に日本語に苦戦していた日々が遠く感じ、将来の成功への入り口に向かって光の如く真っ直ぐ突き進んでいる感触がした。

卒業して真空成膜装置の技術を活かすため、その分野を専門にしている会社に入り、研究開発部門に所属した。その後九年間ほどその会社に勤め研究開発に勤しみながらたたくさんの温かい人々の優しさを感じながら過ご

した。生活は決して余裕のある生活ではなかったが、安定した収入もあり、日本の組織文化に慣れ、仕事も軌道にのり、男とその家族は安定した生活に満足していた。

日本で男一家を助けてくれた心温まるエピソードはたくさんある。当時男には小学校四年生になる娘がいた。ひらがなも読めず日本語が全く分からない中で日本の小学校に転校してきた。驚くことに三ヶ月ぐらいで日常会話を習得し、環境に慣れ始めた。それは男の家族を優しく、温かく支えてくれた人々がいたからだった。商店街で雑貨屋を経営するとても親切な方がいた。時々、日用品や食品をお裾分けしてくれて、異国の地で生活する男一家を気遣ってくれた。夏休みに帰省する時は男の娘も連れていってくれて、日本の他県に帰省するという日本の小学生が普通に経験することをさせてくれた。初めてみる日本の緑豊かな景色が、その人たちの心の豊かさとも相まって、余計綺麗きれいに彼女の目には映った。そんな彼女のランドセルも市役所で働いていた親切な方に

譲ってもらった。使い古されて、決して新しいものではなくシワも寄っていたが、彼女にはどんなピカピカなランドセルよりもそのランドセルは輝いて見えた。背負うたびに、自分が親切な日本の方々から支えられて応援してくれているのだと実感し、将来恩返しできるように頑張るぞという感情が沸き起こった。人一倍努力して、成績はいつもトップだった。このような人々の恩恵を受けたことで、一家は日本国籍に帰化することも決断した。自分の国籍を変えることは、とても重要なことで何か大きなことでもなければそんなことはしない。助ける、支えるというシンプルなアクションでこのように人の心を変えられる力があることにとても驚いた。

一方で彼の妻は当時少しでも家計を支えようと、日本語ができない中、日本の社会で身を粉にして働いていた。今でも区役所などに行くと、彼女はよく「私も初めて日本に来た時は区役所を毎日モップがけをしていたのよ。若いのに偉いねとよく通りがかりの方達から労いの言葉をかけてもらったわ。」と言っている。一家三人がどれ

くらい苦勞したのか想像もしづらいが、小さな幸せで満ちていることは確かである。

光で掴む Japanese Dream

時代はIT革命前夜に移る。

九十年代後半は光通信の分野が急成長しており、その通信に必要な光ファイバーという繊維状のものや光ファイバーという光の波長を精密に制御することができるフイルターという光の波長が高まっていた。しかしこの光ファイバーというものは製造が非常に難しく、開発部門にいた男性と同僚たちはその光ファイバーの製造装置を真空成膜装置を応用して成功すれば、インターネット通信に飛躍をもたらす装置ができるのではないかと考え始めた。研究に没頭して一つの目標を作ろうとした矢先、男には大きな壁が立ち上がった。勤務先会社の社長に、男たちはまるでピラミッドの中に眠るお宝のありかが記された地図を渡すような思いで、自分たちの計画を提案した。開

発プロジェクトにYesと言ってもらえると思った。しかし返事はNoだった。「あの時は研究開発を重ねてきたプロジェクトがあっさり断ち切られてショックだったよ。人間は成功するか失敗するのかがパーセンテージくつきり現れないと挑戦するのが怖くなる。だけど努力することで自信が生まれて、その自信がというのは、成功するかしないかに関係なく自分を強くできる材料になる。」と男は当時の心境を振り返る。

一九九九年八月、ウィークリーマンションの狭い一室で男は背水の陣で起業を決意した。その時彼は実に五十一歳。来日十二年目での出来事だった。「いつも何かに挑戦するときは自分が今の年齢よりマイナス二十歳であるって思ってた行動してるんだよね。」男は笑いながら言った。「日本に来た時ももう四十歳近く。普通は十八歳くらいで留学して大学に入るでしょ。起業も二十代から三十代の方が多からね。年齢が高いつていう不安もあったけど、でも今まで自分を磨いてきたこと

で、自分が一番の味方になって、自分の存在が自分の努力の証となって、そんな不安よりもこれからどう工夫していこうという期待が大きかったな。」この危険なだけでなく可能性に満ち溢れている賭けをするきっかけとなった光通信用のフィルターの成膜装置は、翌年二〇〇〇年に完成された。

何日も五十代の身で川越工場で泊まり込みで働き、まさに時も忘れて没頭して研究した。この男の姿を見て支援してくださった方々がたくさんいた。ある時、大手ベンチャー投資会社の部長が男の手がけている技術に興味を持ち、男に会いに来た。オフィスといっても工事現場で使われているようなプレハブを簡易的にオフィスにしただけの素朴な建物だった。社長というイメージを漂わせない青い作業着を身に纏^{まと}って、「すみません、今まで機械の調整をしていたのでこんな格好ですが」と出てきた男を見るなり、部長はこの会社に投資しようかと決断した。男にとって想像したことがないような多額の投資が入ったのだ。男はよく言う、「このような自分を信じて

支えてくれた人々がいるから私は今ここにいるのだと。」
 このような信じてくれる人がいてこそ完成したフィルタ
 ー装置を見たときに自然と流れ落ちた涙はきつと、自
 分が思う以上に努力してきた人にしか味わえない特別
 なすべての感情が凝縮された一粒の涙だったのだろう。
 二〇〇〇年という年は、この革新的な機械の誕生年でも
 あり、インターネット元年でもあった。その影響もあり、
 インターネット通信の容量や速度は飛躍的に伸びた。そ
 の後、経済の波に揉まれながらも、研究開発に重きをお
 き、技術革新が進み、スマートフォン領域においても欠
 かせない装置を世に出していき、グローバルに展開して
 いった。真空成膜分野の専門性と、地道に工夫できる忍
 耐強さ、家族や仕事仲間をいたわられて結束できる親切な
 心をあわせ持ったこの人だからこそ、光の力で成し遂げ
 られた軌跡だと思う。男の努力はついに報われた。創業
 約十八年目にして二〇一七年、東京証券取引所で上場の
 鐘を鳴らしたのだ。それも、東証一部への直接上場とい
 う偉業であった。

光は常に自分の中に

その男、私の自慢の祖父は、幾つもの険しい道のりを
 乗り越えてきた。今でも、質素な身なりで早朝の電車に
 乗り、会社へと向かう。それでも以前に比べれば、ゆと
 りの時間が出来てきたので、休みの日は、朝日の光が差
 し込む中で家庭菜園に丹精し、夕日の光が差し込む書齋
 で印鑑彫りや書道を嗜み^{たしな}、充実した時間を送っている。
 生い立ちを知るまでまるでこんな苦労はなかったかのよ
 うに感じさせる祖父は穏やかで、でも意志は強く、思い
 やりがあって、たくさん褒めてくれる人だ。初めて生い
 立ちの話をしてくれたのは私が小学生の頃で、その時の
 私は、まだ祖父の凄さが完全にわかっていなかった。中
 学二年生から一年間、イギリスのボーディングスクール
 で学ぶ機会があった。イギリスの普通の日の天気は、冷
 たく、灰色の雲で硬く覆われている。しかし朝日や夕陽
 の時だけは太陽が空一面を塗り替える。燃えるような赤

光がまるで灰色の空などなかったかのように広がる。その壮大な太陽を見るたびに私は祖父の姿に重ね、祖父の偉大さを痛感した。日本とは全く違う異国の地での生活。英語は日本で習っていたためあまり心配していなかったが、慣れない人、文化、家族と離れての寮生活は、最初の頃は慣れることだけでも必死で目まぐるしかった。ふかふかのベッド、家族とすぐ電話できる携帯、安心して相談できる先生やたくさんの友達、毎日温かい3食が約束されていて、言語もわかる環境にいるにも関わらず、辛いなど感じる時もあった。しかし祖父と比べてみるとどうだろう。四畳一間の硬い畳、家族と電話は1ヶ月に1回できればいい方で、知り合いや頼れる人のいない、言語も知らない環境で一人飛び込んで、当然のように自分の目標に向かって努力できる姿はとんでもないと思った。祖父は私によくこう言う「できない理由よりもできる工夫を」、「どんな時も光は常に自分の中にある」と。青少年時代の文化大革命の荒波に揉まれて光が届かないどん底に突き落とされても自分のやることを貫き通

す、初志貫徹の精神を持ちそれが実現できる祖父からの大切な言葉だ。祖父が教えてくれた言葉は、私のイギリス生活での挑戦の源泉となった。

最後に、人の人生というものは、まるで映画のようだと私はこの文を書きながら思った。何もスーパーマンが出てきたり、非日常的なミッションを毎日クリアしなくてもいい。私の祖父の今までの人生を書いてきて、起承転結がしっかりしているということに気づいた。意図的に行ったわけでもなく、ただ祖父や祖母、母の話す言葉をまとめているうちにまるでオリジナルのストーリーを書いているような感覚に陥った。たまに人は、人生が映画みたいに楽しかったらよかったのにと人がいる。あまり過去を振り返る機会がなく、今だけを見つめて生きているため、そう感じるだけかもしれないが、一人一人の人生は必ず物語になっているのだ。フィクションと比べればノンフィクションと聞くとタネも仕掛けもない平坦な議事録のようなものを想像するかもしれない。た

最後に、人の人生というものは、まるで映画のようだと私はこの文を書きながら思った。何もスーパーマンが出てきたり、非日常的なミッションを毎日クリアしなくてもいい。私の祖父の今までの人生を書いてきて、起承転結がしっかりしているということに気づいた。意図的に行ったわけでもなく、ただ祖父や祖母、母の話す言葉をまとめているうちにまるでオリジナルのストーリーを書いているような感覚に陥った。たまに人は、人生が映画みたいに楽しかったらよかったのにと人がいる。あまり過去を振り返る機会がなく、今だけを見つめて生きているため、そう感じるだけかもしれないが、一人一人の人生は必ず物語になっているのだ。フィクションと比べればノンフィクションと聞くとタネも仕掛けもない平坦な議事録のようなものを想像するかもしれない。た

だし、その人が決断する選択とその選択に至るまでに感じた感情、その選択の理由となった意思などを探ると、平坦ではなく、深いまるで本当に映画のような物語に生まれ変わるのだなと感じた。私の今過ごしている恵まれた生活は、このような私の祖父母の苦勞と血の滲むような地道な努力からきていて、祖父母が紡いできた物語の延長線にある。これからの私の人生の中で、投げ出したくなることや、辛くてたまらないことも待ち構えているだろう。しかし私の家族やそのまた前の家族が歩んできた壮大なストーリーの一章の中の一シーンだと想像すると、乗り越えられるような気がする。

祖父が初めて日本の地を踏んでから今年で三十七年目。あの日、一緒に日本に来た夢と希望を詰め込んだ赤いスーツケースは光陰と共に馳せて、今でも私たち家族を優しい光で包んでいる。



中学生の部

優秀賞

上を見て、下を見て

北九州市立篠崎中学校 一年

辻 陽菜子

大好きな、シナモロールのキーホルダー。クマの着ぐるみを着たデザインで、そこから小さな手足を出して、にっこりと笑っている。どこへ行くときも、必ず身につけていた、私の宝物。ずっと大切に持とうと思っていた。それなのに。八月十一日、それは突如として姿を消した。私は、サンリオキャラクターのシナモンが大好きである。小学六年生の時に推し始め、かわいい姿に日々癒さ

れながら過ごしてきた。特にお気に入りのグッズは、そのクマのキーホルダー。出かける時は常に一緒だったのだ、その日も、友達とアドベンチャープールに持っているリュックにつけて、出かけた。バスとモノレールを乗り継ぎ、やっと到着したプールでは、唐揚げを食べ、アイスを食べ、うどんを食べ、浮き輪で回りまくり、滝に打たれ、しまいには溺れかけながらも、友達と一緒にわいわいと楽しい時間を過ごした。体力を使いまくり、くらくらしながらも再びモノレールに乗り、無事家に到着。事件発覚は、夕食後である。風呂に入れば後は寝るだけだと自分の部屋に入り、ハミングをしつつリュックの整理をし始めた。そしてふと、あるものが目に入った。切れたチェーンだった。

あのシナモンのキーホルダーをつけていたチェーンが、切れていたのだ。もちろん、そこにシナモンのキーホルダーの姿はなかった。さっと血の気が引いた。体温が下がっていくような感覚がして、首のあたりにいやな汗が浮かぶ。落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせ、朝

のことを思いだす。もともとつけていたチェーンがなくなってしまうから、別の物で代用したのだ。それがあまり丈夫なものでないことは、分かっていた気がする。でも早く友達と遊びたかったし、急いでいたし、さっさとつけて、出かけてしまったのだ。その結果、落ちてしまった。死に物狂いで部屋の中を探した。小さいからどこかに挟まっているかもしれないし、隅に転がっているかもしれない。でも、なかった。どれだけ探しても、結果は同じだ。もう外は暗い。今探しても仕方ないだろうと思いつながら、サンダルをつっかけて玄関から飛び出した。ありますように、と願いつながらエレベーターを降り、マンションのロビーを必死に探した。どこにもない。マンションを出て、降りたバス停まで探してみる。どこにもない。途中立ち寄ったコンビニの店員さんにも聞いてみたけれど、それらしきものはないという。駅まで行くには十分ほどかかるし、何より暗いから、見つからないかもしれない。後ろ髪をひかれながらも、家に帰った。ソファで頭を抱えていると、母が「プールやバス

に電話してみたら」と言ってくれた。そうか、電話。その手があったか。急いで電話番号を調べる。プールとバスは、今の時間だと電話が繋がらないけれど、モノールならつながるらしい。藁にもすがる思いで電話を掛けた。出たのは女の人だった。どうしましたか、と言う声に、落とし物をしてしまって、とキーホルダーの特徴を説明する。ちょっと待ってください、と言う声をして、音楽が流れ始めた。届いているだろうか、と体をこわばらせながらも、返事を待った。しばらくすると音楽が切れ、お待たせしました、と先程の女の人の声が出た。はい、と思わず背筋を伸ばし、結果を待つ。お調べしましたところ、と女の人は続けた。

「こちらに、そのような落とし物は届いていないようです」
部屋が、しんとした。シヨックと言うか、こういう時に何と言ったらいかが頭すぐに浮かんでこなかったのだ。キッチンから母が、「分かりました、ありがとうございますごさいましたよ」と小声で私に言った。あ、と我に返った。

「分かりました。ありがとうございました」オウムみたいな気分だった。

浴槽で泣いてしまった。漫画か、という気もしたけれど、あれは自分の子供みたいなものだから、しょうがない。出会ったのは五年生だから、三年間の付き合いだ。宝物だ。あれのおかげで、私はシナモンという特別な子に出会えた。当時好きだったキャラクターとシナモンがコラボしていたことから、シナモンになんとなく目が行くようになった。そして友達と一緒に遊びに行った時、それが目に留まった。綺麗な空色の瞳に吸い寄せられるようにして、衝動的にそれを買った。はじめてのシナモングッズだった。それから、シナモンのことをだんだん知っていった、だんだん好きになった。着ているクマの着ぐるみが、シナモンのお気に入りのぬいぐるみのデザインなのだ知ってもっと好きになった。あれがなかったら、まだこの楽しみと幸福感を知らなかったかもしれない。一緒に念願の銀閣寺を見たのもあのキーホルダーだったし、初めて美術部の部室に足を踏み入れた時に一

緒にいたのもあのキーホルダーだったし、ああ学校面倒だなと嘆きつつ共に登校したのも、今日のおやつはなんだろうと考えつつ共に下校したのも、あのキーホルダーだった。思い出の詰まった大切なものなのだ。ある日突然、気づけば、着ぐるみのクマの耳がなぜか跡形もなく取れていたことや、シナモンの尻尾がぐるんと巻かれた形になっているのでそこだけ綺麗きれに汚れを拭きとれないことなどがよみがえってきて、また泣いた。もう中学生なのに、と情けなかった。

翌朝。私はなくしたシナモンを救出するべく、ベッドから起き上がった。一晚寝たせいかわ、頭がすっきりして、昨日より体が軽くなったような気がした。スマホを手に取り、ラインのストーリーを開く。自分がこれを使う日が来るとは思わなかったけれど、誰かシナモンのキーホルダーが落ちているのを見たら教えてほしいと、特徴と一緒に打ち、アップした。自分一人ですすより、友達に協力してもらった方が見つかりやすいと思っただけだ。次に、昨日連絡が取れなかったバスとプールに電話をかけ

て、シナモンのキーホルダーが届いていないか聞いてみた。しかし、どちらも届いていないという。やっぱりそう簡単には見つからないなあ、と思っていると、ラインが来た。昨日一緒にプールに行った友達からだ。

『プールの更衣室で着替えた時にはあった気がするなあ』

じゃあ、帰り道に落としたのだろうか。駅から家まではバスで来たから、とりあえず駅に行って探そう。急いで着替えて、小走りで家を出た。迷いながらもグーグルマップのおかげで何とか駅にたどり着き、駅前の広場を探す。親切な人が何かの上においてくれているか、あるいは（想像はしたくないけど）、誰かに蹴られたりしてベンチの下などにもぐり込んでいるかもしれない。上を見て下を見て探し回った。広場にはない。駅の階段を探す。見つかるのはせいぜい、空の紙コップくらいだった。エスカレーターの間挟まっていたりしないかと思ったけど、ない。朝食を食べていないので、コンビニでシナモンコラボの抹茶ラテを買って飲んだ。甘くておいしかった。構内に入る。三連休だからものすごく人が多い。

踏まれていてもおかしくないレベルだ。冷や汗をかきながらも、足を進める。構内は広いから、まんべんなく見るのにかかる時間がかかった。上を見て下を見て、探す。ない。次に、モノレールの改札口に向かった。電話はしただけれど、一応、窓口の駅員さんに聞いてみた。やっぱり、届いてないらしい。ホームにも入らせてもらったけれど、やはりシナモンの姿はなかった。もう一度、構内を探してみた。やはりなかった。改札横にあるコンビニの店員さんにも聞いてみたけれど、ここにもない。順調とはいかないが、頑張れ、私の抹茶ラテパワーよ。ラインでの母の提案で、駅の落とし物センターに行ってみようということになった。けれども、その落とし物センターがどこにあるか分からない。じゃあヘルプセンターの人に聞いてみよう、建物の中に入った。

聞いてみたところ、駅全体の落とし物センターはないらしい。ヘルプセンターにも届いておらず、探したところ以外となると、もう交番しかないそうだ。さすがに交番にはないだろうなあと思ったので、仕方なくもう一度

駅前広場と階段を探した。上を見て下を見る。でも当然と言うか、キーホルダーは見つからなかった。となると、探していない所は、歩いて行ける範囲ではもう駅前のバス停だけだということになる。ここになかったら、プールのあたりだけだ。そしてそこは、徒歩で行ける距離ではない。ありますようにと心の中で願い、バス停に向かった。

なかった。バス停の椅子の上から椅子の下、地面から屋根の上まで見たけれど、なかった。つまり、歩いて行ける所にはなく、プールの所にあるのだ。足がひりひりとして、痛かった。そして喉がものすごく乾いた。抹茶ラテだけでは足りなかったらしい。なぜ家からトウモロコシ茶を持ってこなかったのか。おまけに抹茶ラテを買って、今の所持金三十円。とにかく暑いので建物の中に入った。涼しいと叫びたい衝動に駆られながらも、ふとあるものが目に留まった。カフェである。正確には、カフェのカウンターに置かれた、キンキンに冷えているであろう冷水である。あの水なら無料でもらえるんじゃない

いか、でも悪いよなと考えた所で、いやこのままだとシナモンを見つめる前に私が倒れてしまおうと思い、カウンターにいた店員さんに「すみません、水一杯ください」と頼んでみた。ちよつと無理ですねと言われるかもしれないと身構えていたけれど「あ、水ですね」とあっさりと言われ、そのポットに入った冷水を、紙コップに一気にどぼどぼと入れてくれた。おおおおお、と餌をもらう犬のごとく、うずうずと待つ。「はいどうぞ」と渡され、いただいた。店員さんから後光が差しているように見えた。

そろそろ帰っておいでという母からのラインで、結局シナモンは見つけられないまま退散することになった。出来る限り探したけれども、見つからないものは見つからない。こうなったらもう一度プールにいくしかないだろう。水が飲めて浮かれていたけれど、シナモンのキーホルダーがないことに変わりはないのだ。シナモンのキーホルダーはあれしかないわけではないけれど、一番思い出が詰まっている物は他にない。早く行かないと、こ

うしているうちに車にひかれたり、誰かに踏まれたりして壊れたりしてしまうかもしれない。すぐに行けないのが本当に悔しかった。あのときにしつかりした丈夫なチエーンを冷静に選んでつけておけば、こうはならなかった。今すぐに見つかったらいいのに。ため息をつきながら帰った。

「二時からアドベンチャープールに行こうか」

「へ？」

父の言葉に、ものすごく間抜けな声が出た。二時からアドベンチャープール？ものすごく遠いし、第一、今日は宿題に全く手を付けていない。それなのに、今日の二時？四十分後ではないか。

「シナモンが無くて駅まで探しにいったんやろ？車で連れて行くから、探して来いよ」

え。

つまり、四十分後に車でアドベンチャープールに向かうということだろうか。今日の？本当に？どうして？言っていることがすぐに理解できない。

「早くうどん食べ終われよ」

そうやって父は煙草を吸いにペランダへと出て行った。ぽかんとしながら、その背中を見送った。

私がいかに必死で行動しているのを初めて見たから、じゃあ、ちょっと手伝おうかと思っただけ。朝ごはんも食わずに朝から必死で電話かけてたしなあ。車の方がすぐ着くし、帰りにサンリブ寄りたいし。と父は言った。きっかり四十分後、朝食の分まで、出汁のきいたうどんを食べて出かけた。「見つかるとはわからないけど、一応な」という言葉に胸がいっぱいになった。いざというときに、手を差し伸べてくれたのは父だった気がする。母に宿題のことを言われるかと思っただけで、日焼けしないように日傘持って行くようにと告げられただけで、いってらっしゃいと見送ってもらえた。「珍しくて必死だったからサービス」と後で二人に言われた。嬉しくて笑みがこぼれそうなのに、胸のあたりがじんとなつて、うるつときていた。変な感じだった。もしかしたらこれは、と思う。こういったら大げさだけれど、なん

だか希望の光が見えたような感覚だった。

とりあえず私はプール前で車を降り、父は車の中で待っていてくれることになった。考えられる場所は三つ。駅までの道、駅、プール。まずは駅へ向かう道を歩き始めた、ところで。そういえば帰る時に間違えて、駅と反対方向に向かってしまったことを思い出した。すぐ気が付いて引き返したけれど、一応行ってみようと回れ右して道に戻る。蹴られたにせよ誰かが置いてくれたにせよ、たぶんあるとしたら道の端だろうと思ひ、道の左右に植えてある茂みの上を見て下を見て、今日何度もやってきた動作を繰り返し、慎重に歩を進めた。通りすがりの人から、あの子何をしているのだろうかという目を向けられるのも、今日だけで百回くらいだ。上を見る。真ん中を見る。下を見る。次の茂み。上を見る。真ん中を見る。下を見る。次の茂み。上を見る。真ん中を見る。下を見る。次の茂み。上を見る。真ん中を見る。下を見る。心臓がどくん、と高鳴った。白い二つのものが見えた。まさか、と思ひながら、恐る恐る一歩踏み出す。それは、

茶色かった。上下に重なった茶色い二つの丸から、白いものが左右に一つずつ出ている。何か動物のデザインのものだ。顔が見えないから、うつ伏せの状態だと分かる。下の丸からは、くるんとした丸いものがぴよこんと出ていた。そつと、それを拾い上げた。それは、クマの着ぐるみを着た、耳の長い、白い動物のキーホルダーだった。空色の瞳が、こちらをずつと見つめていた。

あった。

それは、昨日から今日まで必死に探してきた、思ひ出が詰まった私の宝物、シナモロールのキーホルダーだった。

足も痛かったし、喉も渴いたし、体力をかなり消耗したけれど、探して良かった。探さなかったら、見つからなかった。当たり前のことだけど。ありきたりの感想しか出ないけれど、本当に『よかった』と思う。大冒険をした気分だ。聞き込みなんて初めてした。探して良かった。何より、見つかって本当に良かった。嬉しかったなあ。明日は宿題の進み具合によるけれど、コンビ二でシナモ

ンの一番くじを引きに行く予定だ。もちろん、バッグには、あのシナモンのキーホルダーをつけて行こうと思う。丈夫なチェーンを通して、一番くじは初めてで、何が出るかはもちろん分らない。でも私は、あのキーホルダーが大好きだ。また別に新しく、大切でお気に入りのものが出来たとしても、この日のことを覚えておきたい。上を見て下を見て、汗をばたばたとかきながら、宝物を探した日を。



あさのあつこ賞

サシバに向き合った一年間

宮古島市立伊良部島中学校 三年

我那覇 優愛

「ピクイー ピクイー」

今年も、こんな鳴き声が島中に響き渡る季節が来ようとしています。

私の住む沖縄県宮古島市の市鳥でもあるサシバは、私にとっても身近な鳥です。あの鳴き声が聞こえてくる頃には空に鷹柱を作り、私達に冬の訪れを感じさせてくれる、そんな当たり前の存在でした。

ですが、去年の二学期から数えて約一年間、私にとつてのサシバの存在は大きく変化することとなりました。まず、サシバという鳥をご存知でしょうか。

サシバ（英名 Grey-Faced Buzzard）は、絶滅危惧Ⅱ類に分類されているタカ目タカ科サシバ属の鳥で、全長は47～51cm、翼開長は102～115cmの長くてやや細い翼を持っています。目は、成鳥と幼鳥で違い、成鳥は黄色、幼鳥は暗褐色です。主に、カエルやトカゲ、へビ、昆虫などを食べるサシバは、少しマイナーな渡り鳥で夏は中国大陸や日本列島の山間部で繁殖し冬になるとまた、愛知県の伊良湖岬や鹿児島県の佐多岬、沖縄県宮古島を経由して、フィリピンやインドネシアに越冬します。

また、その中でも、私が住む沖縄県宮古島市伊良部島では、国内最大級のサシバの渡りを見ることが出来ます。そんな私が住む島を代表するサシバですが、年々飛来する個体数が減少しています。絶滅危惧種に指定された2023年の飛来数は約一万羽だったものが2021

年、2022年と一万羽を下回り、2023年は少し増えやっと一万羽ほどでした。人口が約5万人の島に住んでいる私にとって、一万羽はとても多いと感じていました。ですが、今から約40年前の1980年代には、島の人口よりも多い数のサシバが飛来していたことを考えると、とても減少していることがわかります。

なぜサシバはこんなにも減少してしまったのでしょうか。

サシバの存在が変化しただけ

「なんでこんなに暑い日に外で集会なんてするんだよ。」

まだ夏の暑さが残る10月の半ば、私は市の鳥であるサシバの保護集会に参加していました。私の暮らす島では、サシバが渡ってくる10月頃に、サシバ保護を周知するためのパレードが開催されています。パレードと言っても、車五、六台が一行になって島を巡回するという

とても小規模なものです。ですが、島にとっても大切な取り組みらしく、パレードの出発式にはサシバ保護に取り組んでいる野鳥の会の皆さんや、市や島の偉い人などが挨拶をします。私は、島の子どもの代表として、生徒会活動の一環としてパレードに参加していました。

「サシバを保護する必要がある。」

「サシバは守らないといけない存在だ。」

挨拶する人たちは皆口を揃えていました。

なぜサシバを守らないといけないのか。サシバとは私達にとってどの様な存在なのか。まず、なぜサシバが減少してしまったのか。

この出来事がきっかけで、私はサシバに対して次々と疑問を抱くようになりました。

サシバが減少した理由とは

サシバが減少した理由として挙げられる主な原因は三

つあります。一つ目は、地球温暖化による食料の不足。二つ目は、土地開発による森林破壊。三つ目は、ゴミ問題です。また、その他にも繁殖地での、耕作地の放棄などによる里山の減少、中継地や休息地での樹木の伐採などによる樹や森林の減少、越冬地での密猟など様々な問題が挙げられます。

そこで私は、サシバが減少した原因と私達人間には、大きな共通点があるということに気づきました。それは、それらの問題すべてが人間活動の副産物ということです。

地球温暖化は、人間活動によって大量の温室効果ガスが大気中に放出されたことによる、気温の上昇や自然界のバランスが崩壊している現象のことであり、また、土地開発やごみ問題も人間が住みやすい環境を作るために行われているものです。そして、サシバの繁殖地や中継地、休息地、越冬地での問題も、人間が引き起こしている問題です。つまり、サシバが減少した主な原因は私達人間が大きく関係しているのです。

サシバの存在が変化した出来事 一

サシバが減少した理由を調べて、ゴミ問題がとても関係していることを踏まえて、私は学校主催の地域清掃活動に意欲的に参加していました。その活動は、地域行事に向けて会場周辺を清掃しようという内容で、午前中の数時間を予定していました。いくら意欲的になっていた私でも、約1kmほどの会場周辺と活動に参加する生徒の人数を考慮すれば、一人あたりが拾うゴミの量もそこまで多くはないと思っていました。ですがそんなことはなく、予定時間内に回収したゴミは、それを運搬するトラックの荷台から溢れそうなほど大量なものでした。たった数時間、ましてや約1km程しかない限られた範囲で、いくらトラックが大型じゃないとはいえ、これほどまでのゴミが回収されたということに、私は不謹慎ながら感心してしまいました。

そんな清掃活動も終わり、この光景を家族に話そうと

思いながら帰宅している途中、道の脇に捨てられているゴミが目が止まりました。そこには、大量の煙草の吸殻、少し錆びかかった空き缶、汚れが目立つペットボトル、壊れた家電など多種多様なゴミが草むらに隠れて大量に捨てられていました。

「なぜ、こんなところにゴミを平気で捨てられるのか……」

思い返せば、いつも見ているような道端のゴミでしたが、その日は、サシバのことや清掃活動も踏まえてか、疑問に思うと同時に悲しみや怒りなどが入り混じった複雑な感情を覚えたのを覚えています。

サシバの存在が変化した出来事 二

地域清掃活動などの学校行事も無事終わり、帰りに見た不法投棄ゴミはその数日後に撤去されました。

「良かった。」

と内心安心しつつ、冬休みを過ごしていた私は、家族で

市内の方に出かけることにしました。

私の住んでいる伊良部島から宮古島の方にある市内までは3540mの無料で渡れる橋としては日本で最長の橋である伊良部大橋を渡る必要があります。また、伊良部大橋周辺や、伊良部島の東側には海岸線にそって多くのリゾートホテルが建設されています。

綺麗な宮古ブルーの海、本州の方では食べられない美味しい食べものが食べれたり、まるで異国の地にいるような気分が味わえるとして、県内外を問わず、国外からも沢山の人に訪れられている宮古諸島では、観光業が盛んに行われています。県外・国外の人たちにこの島の良さを知ってもらう良い機会になる事は、とても嬉しいことですが、ホテルなどの建設によりたくさんの自然が開発され、年々サシバが休息できる場所が減少しているのも事実なのです。

ですが、窓から見える沢山のホテルはそんなことを感じさせないぐらい華やかで、私はなんとも言えないような気持ちになりました。そんな様子で窓の外を眺め

ていた私のことがバックミラー越しで見えたのか、運転中の母がポツリと

「住みにくい島になったよね。」
そう口にしました。

私がこの島で生まれ育ってもうすぐ15年が経とうとしています。ですがこの島を、不便な島だとか、田舎だなど思ったことがあっても、住みにくい島だと思ったことは一度もありませんでした。私の母は生まれも育ちもこの島で、私の倍以上この島の変化を見てきたからこそ、そう感じるのかもしれないと思いました。

そして、私は母のこの発言から、サシバと私達人間には他にもっと深い関わりがあるのではないかと考えるようになってきました。

サシバの存在が変化した出来事 三

時がすぎるのはとても早いものであつという間に、私は中学3年生に進級していました。サシバと私達の関わり

りについての答えは一向に出ないまま、新学期が始まり、特に変わった様子もなく私は学校生活を過ごしてまいりました。そんな私に、英語の先生からこんな誘いがありました。

「今度開催される英語パフォーマンスコンテストのプレゼンテーション部門に出場してみないか。」

元々このコンテストには興味があり、参加しようか迷っているときに来たお誘いでもあったため、私はコンテストに参加することにしました。プレゼンでは、伊良部島ならではのものです、且つ、自分たちの経験を話せるものとして、「サシバを護るために私達ができること」について発表することになりました。

発表の準備は、日本語の原文を作成し、そこから先生が英語に訳したり、先生が翻訳した分を元にパワーポイントを作成するというもので、私は一緒に発表する仲間と放課後の時間に準備を着々と進めていきました。

本番では、サシバが島を代表とする鳥であること、大量のゴミによってサシバが休息できる場所が減少してい

ること、自分たちの学校の取り組みや日常生活でできる取り組みなどについて発表しました。実際に、私が発表した文章を一部ご紹介したいと思います。

「While we made this presentation, we came to the realization that “an environment where the Grey-faced Buzzard thrives is also favorable for humans”」

訳 今回の発表を準備する中で、「サシバが生きやすい環境は、人間も生きやすい環境ではないか。」と考えました。

これは、私が日本語の原文をを作成する中で導き出した、サシバと人間の深い関わりとはなにかという疑問に對しての答えです。

ここまでの約一年間の体験や「サシバが生きやすい環境は人間も生きやすい環境」という言葉から、私にとつてのサシバの存在は、当たり前前の存在から唯一無二のかけがえのない存在へと大きく変化しました。

サシバも人間も生きやすい環境とは

島の現状は、地球温暖化やごみ問題、土地開発による森林破壊などの影響でサシバだけでなく、私達人間の健康や生活環境も悪化しています。具体的な例としては、森林破壊による光合成の働きの減少で温室効果ガスが増え続け地球温暖化を加速する恐れがあること。また、その影響で、熱中症などの人体への影響だけでなく、異常気象で引き起こされる自然災害などの生活への影響や食料への影響などが深刻化していることなどが挙げられます。このようなことから、サシバだけでなく地球上に暮らす私達人間も含めたすべての生物に悪い影響をもたらしていることが言えるのです。

その様な環境は、本当にサシバも人間も生きやすい環境なのでしょうか。私は、そうは思いません。

事実、サシバが数多く生息している自然環境では、豊かな土壌、清澄な水や空気が作られています。それらの

環境は、サシバが生きやすい環境と言えるでしょう。そして、サシバが生きやすい環境が人間も生きやすい環境というのであれば、その様な環境は同様に、私達人間も生きやすい環境になるのではないのでしょうか。

「ピックイー ピックイー」

今年もあの鳴き声が聞こえてくる季節が近づいてきています。去年の二学期から数えて約一年間、私にとってサシバの存在は大きく変化しました。

この一年間で経験したこと、学んだことは私自身にとって物事に対する一つの価値観が変わった、そんな体験でした。そして、この約一年間で経験したこと、学んだことは私の一生モノの思い出です。

また、サシバが減少した原因でもある地球温暖化やごみ問題、土地開発による森林破壊は世界的な問題でもあり、私が住む島が総出で取り組んだとしても一向に解決することはありません。ですがこのままだと、サシバは絶滅してしまう可能性があります。私達が今、サシバの

ために行動することで、サシバを守ることができ、それがサシバの未来、そして私達の未来やこの地球の未来にも繋がっていくのではないのでしょうか。少なくとも、私はそう考えます。

そして私は、いつまでも多くのサシバが渡ってくることに、勇壮な夕力柱が見えることを願っています。



中学生の部
選考委員特別賞
最相葉月賞

青を継ぐ

岡崎市立岩津中学校 三年

大水 音諒

二千二十二年、三月十八日。金曜日、雨。朝から空はどんよりと曇り、そろそろ雨を降らせようかと空が迷っている様子が伝わってくる、そんな天気でした。三月にしては肌寒く、少し重たい朝を迎えていました。その日はきつと、大勢の小学生や大人達が空を見上げ、お願いだから降らないで、と祈っていたに違いありません。それなのに、僕は家の窓から空を見上げても、同じように

は思いませんでした。左手で少しだけ開けたレースのカーテンを握り締めたまま、僕は空よりももっと遠くを、ただぼんやりと見ていた記憶があります。その日は、僕が通っていた小学校の卒業式の日でした。

「朝ご飯、できたよ。」

母の呼ぶ声で、遠くへ行っていた心が、飛び込むように自分の体の中へと戻ってきました。パジャマ姿のまま、いつもより更に遅いペースで食べる僕を、母は急かすことはありませんでした。

「ごちそうさま。」

全部食べ切れなかったことに罪悪感を感じながら手を合わせると、

「じゃあ、この薬を飲んでおいてね。」

と、母が水の入ったコップと、三種類の薬を僕の前に置きました。母に聞こえないように小さくため息をついたあと、僕は目を固く閉じ、その薬を一気に飲み干しました。

「二応、服を着替えようか。」

母が優しい声で言いました。本来着るはずだったネクタイ付きのスーツは、ハンガーに掛かったままです。それでも、今日は普段よりも少し雰囲気の違う服を、母はていねいにアイロンがけをして僕に用意してくれました。

卒業式の八日前、三月十日。その日は午後から体育館で、中学の入学説明会が行われることになっていました。しかし、四時間目頃から体調に異変を感じていた僕は、授業の途中で保健室へ行き、給食も食わずにベッドで横になったまま、五時間目を迎えていました。養護の先生が僕の体温を計ると、保健室に来た時には微熱程度だった体温が、ぐんと上がっていました。

「お母さんに迎えに来てもらうようにするね。」

その時先生が向けてくれた眼差しは、目元までしっかりマスクで覆っていても、優しさと安心感をくれるものでした。

しばらくすると、母が迎えに来てくれました。先生は先程の優しい口調から緊迫感のある声に変わり、母にこ

う告げました。

「のり君のクラスですが、欠席や早退の人数がかなり増えていきます。病院で検査をすることをお勧めします。」

「検査、ですか。」

母はまるで暗い穴の中からつぶやくように、そしてその穴の中に沈んでいくかのような声で言いました。

重い足取りで校舎を出て車に乗ると、母は病院へ行くべきかを迷っていました。視線を落しながらハンドルに両手をかけ、少しの間、いいえ、時間に見ればほんの二、三分でしたが、母の頭の中は様々なことを予想し、乗り越える手段を全力で考えていました。最後に一度、ゆっくりと息を吐くと、まずは家で様子を見ることにしよう、と言いました。僕は申し訳ない気持ちと、熱のせいであまりぼんやりとしていたため、自分がどうしたのかなどと考える余裕もなく、母の提案に従い家に帰り、すぐに布団に入りました。

しかし、体温を計るたびに熱は上がっていきます。そのうち僕は、目を開けることもできなくなっていました。

その晩、教頭先生から母に電話がありました。保健所からの指導があり、明日から六年一組は七日間の学級閉鎖になる、という内容でした。

七日間の学級閉鎖。ようやく卒業式の練習が本格的に始まったばかりなのに。卒業まであと七日なのに、卒業式当日まで学校に行けないの。友達に会えないの。

頭の中で高熱にぐるぐるとかき混ぜられるように、何度もその言葉が回り続けました。

翌日になっても、僕の熱は下がりませんでした。母は保健所に電話をし、検査の予約を取りました。当時、世界中に広がり、たくさんの死者を出したあのウイルスに、僕は感染した可能性があったのです。

もしも感染していたら、十日間家から出られない。卒業式、どうなるんだろう。検査結果が出るまでの二十四時間、不安で頭がいっぱいでした。

検査の翌日、電話で告げられた結果は、陽性でした。その瞬間僕の心の時計は止まり、静かに壊れていくのを感じました。

小学校に入ってからからの六年間、当然楽しかったことばかりではありません。友人関係で悩んだこと、部活動でなかなか活躍できずに悩んだこと、勉強した成果が出せなくて苦しんだこと。その全部から逃げたくて、学校を休みたい、行きたくない、と数え切れないほど葛藤かつとうを重ねた日々。それでも、その度に周りの人の大切さや自分が支えられていることに気付き、母が少ないパート代から精一杯の思いで買ってくれたランドセルを背負って、六年間通ったのです。最後の最後でこんなことが自分の身に降りかかるなんて、想像もしていませんでした。

三月十八日。大勢の人が願ったであろう、今日だけはどうか雨を降らせないで、という気持ちは僕の中には一欠片もなく、悲しさと虚しさ、とてつもない悔しさの中、時が止まった部屋のなかで、僕は喉の奥の薬の苦さだけを感じていました。

卒業式での晴れ姿を見せられなかった気持ちもあり、いつもと変わらぬ笑顔を向けてくれる母を見るのが辛く感じました。そしてもっと僕を苦しめたのは、離れて暮

らす祖父に対しての申し訳なさでした。

祖父は僕と同じで、貧しい母子家庭で育ちました。

祖父が九歳の頃のある朝、いつもの時間になっても起きてこない曾祖父を起こしに行くと、布団の中で亡くなっていたそうです。前夜、曾祖父は仕事から帰ると、「風邪を引いたようで、少し体がえらい。薬を飲んで今日は早めに寝る。」

と言って、布団に入ったそうです。今のように詳しく死因を調べてくれることもない時代だったので、曾祖父に何が起こったのかは誰にもわかりません。しかし確かなことは、その時九歳だった僕の祖父は、四人弟妹の長男として、そして自分の母親を支えるために、その日から心を大人にした、ということなのです。

祖父は自分の将来の夢にふたをして、家族のために必死で働いたそうです。祖父には立派な学歴はありません。曾祖父が残した、借金だらけの小さな町工場を、学校に通いながら毎日手伝い、まだ幼かった弟や妹達の学費を工面したそうです。その気持ちに応えるように、祖父の

弟妹は立派な大学へ行き、学校の先生になったり、一流といわれる企業への就職を果たしました。

実際その話は大叔父から聞いた話で、祖父から直接聞いたことは一度もありません。辛かったから語りたくないのか。それとも、自分の果たすべき役割を果たし、弟妹達が幸せになったことで、祖父の中では完結したことだからなのか。僕は後者だと思っています。それは、これまで一緒に過ごしてきた時間の中で、容易に感じ取ることができません。

そして祖父と同じく、僕の母も僕のために、休みなく働いています。小学生の頃は、土曜日は弁当を持って、学区内にある児童育成センターで過ごし、日曜日は祖父母の家で過ごしていました。

毎日の散歩を日課とする祖父母と一緒に僕も歩くことで、多くのことを学びました。物知りの祖父は、空を指差し、天気の移り変わりや、季節ごとに変化を見せる雲の名前を教えてくださいました。植物の名前、草笛の吹き方、神社の参拝の仕方。そして落語が好きな祖父は、笑いの

中にも人生の気付きにつながるような落語を、いくつも話してくれました。

僕が小学生の低学年だったある日曜日、いつものように祖父と散歩をしていた時でした。その日は車通りが多かったため、祖父が僕の手をつないで歩いてくれました。つないだ瞬間の不思議な感触は、今でもはっきりと覚えています。僕の手は、どこも重なり合うことのないそのいびつな形の手は、九歳で大人になった祖父が、家族を支えるためにどれだけ耐え抜いてきたかを、一瞬で物語るものでした。まだ幼かった僕は、当時は祖父の苦勞を知りませんが、重ならないその手から伝わる温かい何かを必死に探るように、祖父の手を離さなかったことを覚えています。

こうして振り返ってみると、祖父は自分の知識や経験を、まるでバトンをつなぐように、僕に速度に合わせてゆつくりと、時間をかけて渡してくれているように感じられます。

そんなふうに僕を大切に見守り、育ててくれた人達の

おかげで、無事に六年生になることができました。六年生になると、学校生活の様々な場面で卒業アルバム用の写真撮影が行われたり、卒業文集を書き始めたりし、通い慣れた学校から巣立つことを、少しずつ実感していきましました。

秋が過ぎ、冬の寒さが訪れ始めた頃、僕は祖父に何かお礼ができないかと考えるようになりました。プレゼントを渡そうかと思いましたが、質素な暮らしをしている祖父が何を欲しいと思っているのか、考えればきりがなく、なかなか決まりませんでした。そんな時、卒業式では受け取った卒業証書を、式の中で保護者に手渡す流れになっていることを知りました。僕は、これだ、と思いました。母への感謝はもちろんありましたが、今回はどうしても祖父に手渡したい、と母に伝えました。すると母は、

「いいことを考えたね。大賛成。」

と言って、僕の頭を大きくなでくれました。卒業式当日のその瞬間まで、祖父には内緒にしてサプライズとす

ることになりました。祖父に卒業式の出席をお願いすると、とても喜んでくれました。僕は残り少なくなった学校生活を悔いのないものにしようと、日々を大切に過ごしました。

しかし、僕にはその卒業式は訪れなかったのです。当日は、天気予報で聞いていたよりも、雨は早くから降り出しました。僕の心そのものを表していたかのようにでした。

検査結果が出た日に、祖父に電話をし、卒業式には出られなくなったことを、奥歯をかみしめ、涙をこらえながら伝えました。

「それは残念だったなあ。のり、謝らなくてもいいんだ。一日も早くのりが元気になってくれたら、それが一番嬉しいことなんだよ。」

と、祖父は優しく気づかってくれました。

「中学の卒業式には必ずじいちゃんに出てもらうから、じいちゃんもそれまで体に気をつけて、絶対に元気でいてね。」

悔しさを、三年後の希望につなげるように祖父に伝えました。

そして僕は今、中学三年生になりました。入学してからは挫折の繰り返しでした。何度心が折れたか、数えられません。でもその心を支えてくれたのが、卒業式への思いでした。

逃げてはいけない。負けたって、正々堂々と戦い続ける。九歳だったじいちゃんがそうしたように。

今日まで一日も休まずに学校に来られたのは、いつもその思いが心にあつたからです。想像を超えるような悔しい経験が、僕の進み続けようとする力となり、周囲への感謝の気持ちにつながってきたのなら、あの三月十八日を、そろそろ受け入れる時が来たのかもしれない。

満開の桜の花が、空の青さで輝きを増し、始まりの時をまぶしいほどの希望で迎えた中学校入学式の日。

あれからもう、二年以上の月日が経ちました。僕は校舎の窓から、そして校庭から、何度空を見上げたことでした。

よう。思い返せば、空を見上げる時はいつも苦しみと戦い、負けてしまいそうな時でした。そんな時に見上げる空は、雲一つなく晴れていても、あの卒業式の朝と同じように、どんよりと重く、進むべき道を隠してしまうように見えました。

僕と同じこの中学に通っていた祖父も、六十三年前に同じ場所から、苦しみを抱えて空を見上げたことがあったのかもしれない。十五歳だった頃の祖父は、母子家庭の長男として、どんな気持ちで未来に向かっていたのでしょうか。大人になっていくことに希望を持っていたのでしょうか。それとも、不安のほうが大きかったのか。いつでも聞くことができるその質問を、僕は永遠に祖父に問うことはないでしょう。それは、いびつに曲がり、形とは矛盾するように温かく僕を包み込むあの手が、もう答えをくれているからです。

来年の三月。僕は迎える卒業式で、まだ僕の中に残っている、弱く幼い自分からも卒業します。

「よし。」

卒業式で名前を呼ばれた時、その一瞬の返事の中に、十五年間一人で僕を育ててくれた母へ、感謝の気持ちが全て届くように、体育館いっぱい声を響かせます。そして、じいちゃん。生きる力と共に温かいバトンを渡してくれた、世界で一番美しいその手に、今度こそ卒業証書を渡します。

だって僕の目に映る空はもう、しっかりと青く見えているのですから。



リリー・フランキー賞

実弟のはじめてのおつかい

筑波大学附属中学校 三年

八尾 結花

私には六歳になる二番目の弟がいます。元気いっぱい
で友達も多く、何にでも興味を持つ性格です。両親には
甘えることが多いのですが私に対してはいつも勝気で
す。運動神経も良くて水泳では既に選手育成コースに所
属しています。そんな弟が大好きなテレビ番組がありま
す。それは、二歳から六歳くらいまでの子供たちが初め
ておつかいをする番組です。それを録画しては繰り返し

見て楽しんでいきます。何が楽しいのか聞いてみると、お
つかいできるのが心配になりながら面白くて観ている
とのことでした。出演している子供たちがおつかいする
物を忘れたり、落としたりすると笑ってみたりと、なぜ
か高い視点で視聴しています。さらにその番組を観てい
て、どんなシーンでも泣いてしまう父がいます。そんな
父にさりげなくティッシュを渡すのも弟で、すべての現
象に対して楽しんでるように見えます。ですが、よく
よく考えてみると弟が一人でおつかいにいったことはな
いように思いました。それを両親に聞いてみると確かに
その通り。弟はおつかいに出かけたことがなかったのだ
です。テレビの世界と現実の世界ではどれくらいのギャッ
プがあるのか、また弟が遭遇する数々の難問に対してど
のように対処するのか、弟の成長過程という名目にして、
両親に弟のはじめてのおつかいを打診してみました。

おつかいに行かせることに対しては了承を得ました
が、どんな内容にしてどのようにそれを観察するのが
テーマとなりました。確かにテレビのように大量のスタ

ツフがいる訳ではありません。そこで発案者である私が考えた方法は以下の通りです。買い物する場所は近くのスーパーマーケットと花屋としました。状況の確認は私が尾行をします。テレビほどの会話を拾うことは難しいとは思いますが、状況を確認することは出来そうです。買い物する商品は、母が好きなひまわりの花、そしてたこ焼きの材料としてキャベツとたこのぶつ切りとなりました。

とある日曜日、母が弟に買い物物の打診をしたところ、その依頼を拒否。理由として、疲れた、忙しいなどを挙げていましたが日曜の午前中に、疲れるイベントはなかったし、予定は何もないので、忙しくはありません。間違ひなく、おつかいを怖がっているようです。そこで私は「おつかいしたことがないから怖いのか?」と笑いながら聞いてみました。私に勝気な弟はそんな私の態度が気に入らなかつたのか、「そんな訳ないよ。じゃあ行くよ!」

おつかいを快諾することとなり、弟のはじめてのおつかいは始まりました。

私の家はマンションなので、弟が出掛ける前に私は下に先回りして尾行のスタンバイを始めました。弟を待ち続けること数分で、下に降りてきました。不安そうな気配は全くありません。軽い足取りで商店街に入っていきます。予想とは反対にまずは、花屋に行きました。店内が広くはないので、尾行は店の前までとなりました。果たして弟はひまわりを購入することができるのか。遠くから様子を見ていましたが、困っている様子はありません。しっかりと店員さんと会話をしながら買い物をしているようです。手には、ひまわりを一本握っています。包装されたひまわりを持って外に出てきました。どうやら何事もなく任務は完了したようです。

「これは何事もなくおつかい完了するかな」と考えながら追尾。弟は二軒目、スーパーマーケットに入っていきます。買い物かごを持って、たこのぶつ切りを見事に選択。たこ焼きが大好きで日頃からお手伝い

をしている弟が間違えることはありません。しっかりと選び終えました。最後はキャベツ。野菜コーナーに向かつて行きましたが、ここで難問が出てきました。キャベツとレタスに悩んでいる様子が伺えます。確かにこれは、子供が迎える難問として代表的なものではないでしょうか。キャベツを見る、レタスを見る、キャベツを見る、を繰り返します。何度か往復したところで今度は一玉、半玉を見えています。千切りした状態や細かく切ったキャベツを見ることが多い弟は非常に悩んでいました。東京のスーパーマーケットなので、店員さんは少なく聞くことも出来ません。弟はどうするのだろうと見ていると、キャベツでもなくレタスでもない場所へ向かって行きます。そこで彼が手に取ったものは、餃子の具が一袋にまとめて入った野菜セットでした。確かにたこ焼きを作る際に、この野菜セットを母が使うことが多々ありましたが、キャベツのリクエストをした上で、これを選択するとは思いませんでした。弟にはこれがたこ焼きで使用する時のキャベツであり、正しい選択なのだと思います。

最終的に買い物かごには、たこのぶつ切りと野菜セットが入っています。弟はレジに向かいました。そこで私は初めて気付いたことがありました。そのスーパーマーケットはセルフレジだったのです。テレビで見ているのは店員さんとの交流。でもこの店でそれはなく、セルフレジ。悩みながらもバーコードを読み取っています。母と買い物をしている経験から見て学んでいたのでしょうか。しっかりと対応が来ています。支払いになって今度は悩んでいます。ポイントカードの提示画面となっています。それに対応したら今度は支払い方法の選択です。なんとか現金を選んだ先に今度はレジ袋の選択、その先には領収書かレシートかの選択となりました。セルフレジの選択項目の多さに改めて気付きましたが、大人に聞くことなく、買い物を終了することが出来ました。帰宅に向かう足取りも軽くマンションに入っていました。尾行している私もテレビとのギャップをとて感じました。まず、ここが東京であり、人々との触れ合うような機会が少ないこと、買い物のスタイルにも変化が多いこ

とです。環境の違いがこのようなギャップを生むのか、
と思いました。よく考えると弟は母の行動を観察してい
たし、買い物目的も明確でした。テレビで見るような
人々との交流や買い物袋が破けて荷物が落ちてしまうよ
うなハプニングはありませんでしたが、弟のはじめての
おつかいが出来たことは私には嬉しく思えました。私が
家に帰ると、花瓶にひまわりがさしてありました。

「今日のたこ焼きは俺が作る」

と誇らしげな弟を見て、都会で成長する弟の頼もしさを
改めて感じる事が出来ました。その後のたこ焼きパー
ティでは勝気な弟が私よりも美味しいたこ焼きを作ると
息巻いています。

小学生の部

受賞作品



大賞 半分メシ

片桐 紡 埼玉県 東北小学校 3年

最終候補作品

令和2年7月球磨川氾濫について 矢裂 葵 福岡県 6年

あるクラスのキセキ 小林 言寧 東京都 5年

優秀賞 母と私のがん戦記

能美 にな 福岡県 明治学園小学校 5年

わたしのたからものへピヤ 喜多村 悠二郎 東京都 5年

男から女へ 川名 蒔子 東京都 4年

初めての体けん

喜多 結理 神奈川県 LCA 国際小学校 3年

じしんのときの自信はこわい 大池 悠真 福岡県 2年

選考委員特別賞

あさの あつこ賞 自分が自分へ

川名 岳大 東京都 向原小学校 6年

人を追究する 私のレストランペット 小川 彩有里 大阪府 6年

最相葉月賞 たいは、なぜ赤いのか

立山 怜佳 大阪府 阪南小学校 2年

大きなかぶとじゃがいも 山内 英幸 神奈川県 4年

リリー・フランクナー賞 こくらのきりだんす

若狭 早 愛媛県 愛媛大学 教育学部附属小学校 1年

私のランクアップトランペット 平家 明澄 東京都 5年

中学生の部

受賞作品



大賞 雲散鳥没

チャケ レオン
ドイツ Jakob-Fugger-Gymnasium 3年

優秀賞 光に馳せる

孫 莉佳
東京都 日本女子大学附属中学校 3年

上を見て、下を見て

辻 陽菜子
福岡県 篠崎中学校 1年

選考委員特別賞

あさの あつこ賞
サシバに向き合った一年間

我那覇 優愛
沖縄県 伊良部島中学校 3年

最相葉月賞 青を継ぐ

大水 音諒
愛知県 岩津中学校 3年

リリー・フランクナー賞
実弟のはじめてのおつかい

八尾 結花
東京都 筑波大学附属中学校 3年

最終候補作品

父のギター ～父の面影を求めて～

真田 隆之介 長野県 3年

「国民皆保険」制度の歴史と課題
—制度の安定的維持について—

中川 瑞祥 大分県 1年

空色

久野 水歌 東京都 1年

ルッキズムから抜け出したい

栗原 朝 東京都 2年

汝を愛し、汝を憎む

清水 すみれ 岩手県 3年

優先席の先に見えたもの

幡野 心春 東京都 3年

箱根浪漫

石川 爽志 埼玉県 3年

動画共有サービスでの成功方法

日高 大翔 福岡県 2年

僕の曾祖母の記録

REI 宮城県 1年

ちゃちゃと私の22日間

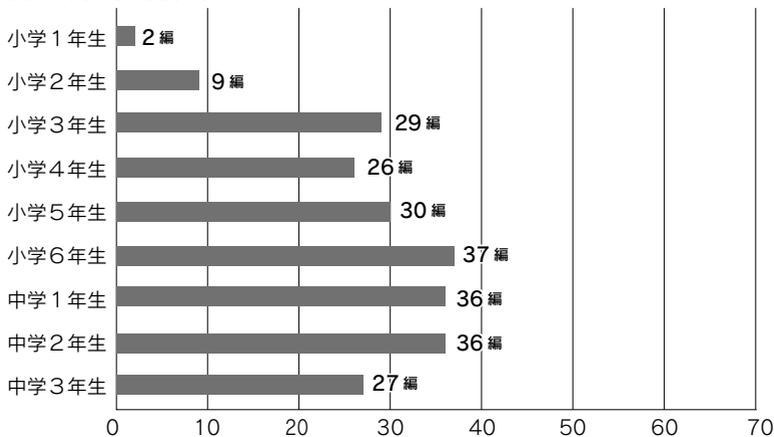
山内 結羅 北海道 3年

(令和6年度)第16回 子どもノンフィクション文学賞応募状況

◎応募受付数 **232** 編

小学生 133 編 (昨年 214 編) / 中学生 99 編 (昨年 251 編)

◎応募者学年別構成



◎応募者地域別構成

地域	応募数			九州内訳 (再掲)	応募数		
	小学生	中学生	計		小学生	中学生	計
北海道	0	3	3	福岡県	63	20	83
東北	1	8	9	(うち市内)	(52)	(5)	(57)
関東	36	27	63	佐賀県	0	0	0
信越	3	3	6	長崎県	1	0	1
北陸	0	0	0	熊本県	0	0	0
東海	2	10	12	大分県	0	1	1
近畿	18	17	35	宮崎県	1	0	1
中国	1	2	3	鹿児島県	0	0	0
四国	1	3	4	沖縄県	0	4	4
九州	65	25	90				
海外	6	1	7				
合計	133	99	232	合計	65	25	90

事前選考委員

(五十音順)

相本 倫子 石橋 聡 伊藤 和人 岩渕 邦夫 上野 浩昭 神村 恭子

第16回子どもノンフィクション文学賞

受賞作品集

二〇二五年三月二十二日 発行

編集・発行 北九州市立文学館

〒八〇三二〇八一三 北九州市小倉北区城内四一

電話 〇九三二五七一五〇五

FAX 〇九三二五七一五二五

印刷・製本 有限会社 青雲印刷

※本書掲載の記事及び写真の無断転載・複製を禁じます。

子どもノンフィクション文学賞



主催：北九州市 北九州市教育委員会 協賛：日本児童図書出版協会

後援：朝日学生新聞社 公益社団法人全国学校図書館協議会 公益財団法人海外子女教育振興財団